







江戸名所圖會卷之五

玉衛之部目錄

湯島聖堂  
湯島神社

根生院  
妻地心神社

中島辨財天  
東叡山寛永寺

本江寺  
谷中瑞林寺

浄光寺  
瑩澤

七面大明神社  
青雲寺

圓満寺  
湯島天満宮

三橋  
東叡山寛永寺

大佛殿  
谷中瑞林寺

瑩澤  
七面大明神社

青雲寺  
養福寺

日暮里  
道灌山

神田明神社  
靈雲寺

湯島神社  
湯島天満宮

池の端錦袋園店  
不忍池

同祭禮の圖  
麟祥院

不忍池  
看蓮舟

雲水塔  
文珠橋

学寮  
同山堂

文珠橋  
同山堂

同山堂  
同山堂

同山堂  
同山堂

同山堂  
同山堂





根津権現社 法外観音堂

根津権現地

同赤不動堂

六角朝日富士の宮

圓勝寺

白鬚明神社

飛鳥山

王子権現社

七尾祭礼の宮

金輪寺

金剛寺

紀州明神社

曙の里

根津権現地

駒込吉祥寺

田畑子樂寺

深井西福寺

昌林寺

平塚城跡

音川

王子権現社

十八講の宮

遊不動寺

三修法住寺

駒込大観音

神明宮

六角朝日

深井西福寺

平塚明神社

同合戦の宮

同新酒亭の宮

装束富衣裳櫃

石井井川

泉流遊

赤羽八幡宮

妙林寺 田中林

丸山淨心寺

富士沙洞宮

八幡宮

西谷谷量寺

同末由の宮

犬返物上覧の地

延冊前舊跡

花徳祭の宮

除夜狐火の宮

松指安殿天

稻付静徳寺

川口渡

川口若光寺

振東塚

紀州明神社

渦田の園

清光寺

地蔵堂

豊島の驛

豊島康家清光之墓

若文八幡宮

石橋寺

豊島川



聖堂



新葉集 釋奠

かゝ人忠

むらゝの

ふをね

うけゝ来て

あふけい

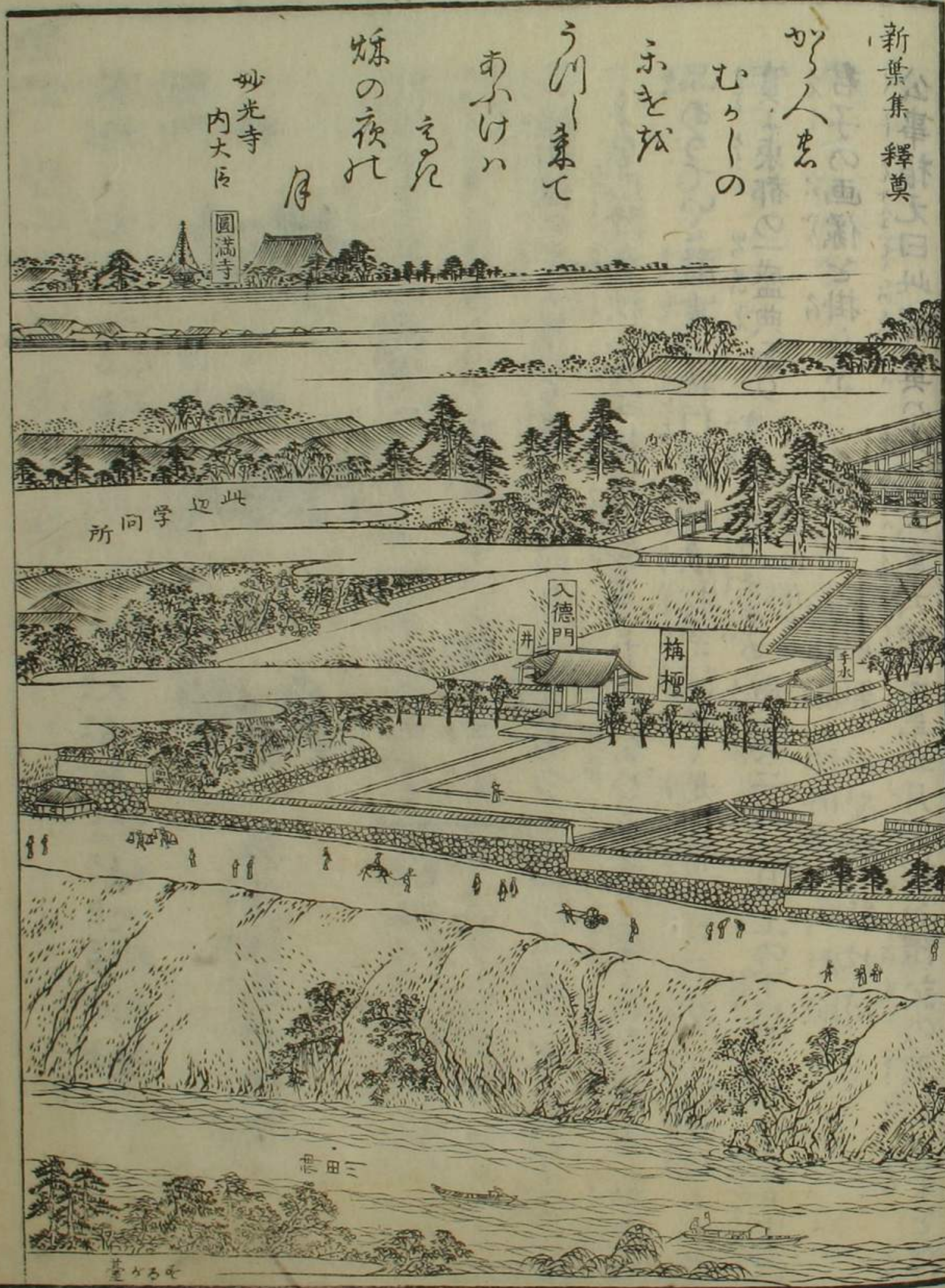
えん

煉の夜に

月

妙光寺  
内大臣

圓滿寺



此邊 同学所

入徳門

梅柳

三田

花石



聖堂 昌平橋の外湯島あり

本殿 文宣王 右顔子 曾子 孟子 額 大成殿 元禄大樹御筆

廊門 額 唐門 額

香壇

人徳門

惣門 額

高仰

各 持明院基輔卿筆

寛永十年尾呂亞相公 義直卿

林家別荘の地

今東藏山より所の山王の社の

あり一廈と徑営あり

聖像ありひし顔曾思子の像を置て先聖殿と號ひしに

其後回祿の災は罹り遂に元禄四年

台命あつて今の地へ遷させられ御造営有

しよと已降春秋二度の釋奠怠ふことなし 公のさうあり國々の列侯より獻備の

品ありてと嚴重に執行す 儒宗林祭酒世々是を司る 奉邦第一に学校ありて

實は東都の一盛典あり 寛政の今所造営あり 釋奠二月八月上の下れ日に行る 此日宋六

君子の画像を掛らふ 従祀 程明道 程伊川 邵康節 張横渠 周茂叔 朱文公

公事根元曰此釋奠は文武天皇大寶元年二月より始ふ 禮記の玉制小菜を釋

幣は奠て先師を禮せとあり 此故に釋奠といふあり 後漢明帝孔氏宅に

幸して仲尼ありひし七十二弟子を祠とみえたり 又先聖と云孔子といひ先師と云

顔回といひひし周公を先聖と云孔子を先師といひ申さる 唐太宗貞觀二年より

あつたため先聖先師と云孔子顔回と申さる 又神護景雲二年孔子宣父を改

て文宣王と申さる 弘仁格に見えあり 續日本紀 學令集解等

年中行事 釋奠 弘仁の年 弘仁の年 弘仁の年 弘仁の年 弘仁の年 弘仁の年 弘仁の年 弘仁の年

新葉集 弘仁の年 弘仁の年 弘仁の年 弘仁の年 弘仁の年 弘仁の年 弘仁の年 弘仁の年

神田大明神社 聖堂の北あり唯一あり 江戸總鎮守と稱せ

祭神 大己貴命 平親王 將門 靈 二坐

社傳曰 皇四十五代聖武天皇の御宇 天平二年に鎮座ありて 其を免柴崎村に

其舊社神田橋 ありし頃 頃中古荒廢し 既し神燈絶ちて せしを遊行上人等二世真

教坊東園遊化の砌に 至り 將門の靈を合て 二座とし 社の傍に 宇内草庵に

むすひせ 寄道場と號し 輪寺是なり 其後慶長八年當社を駿河臺より川



神田明神社

暮景集  
深夜の帰郷と  
社  
台  
志

鳴流れて  
都  
志



裏門

はまの  
路

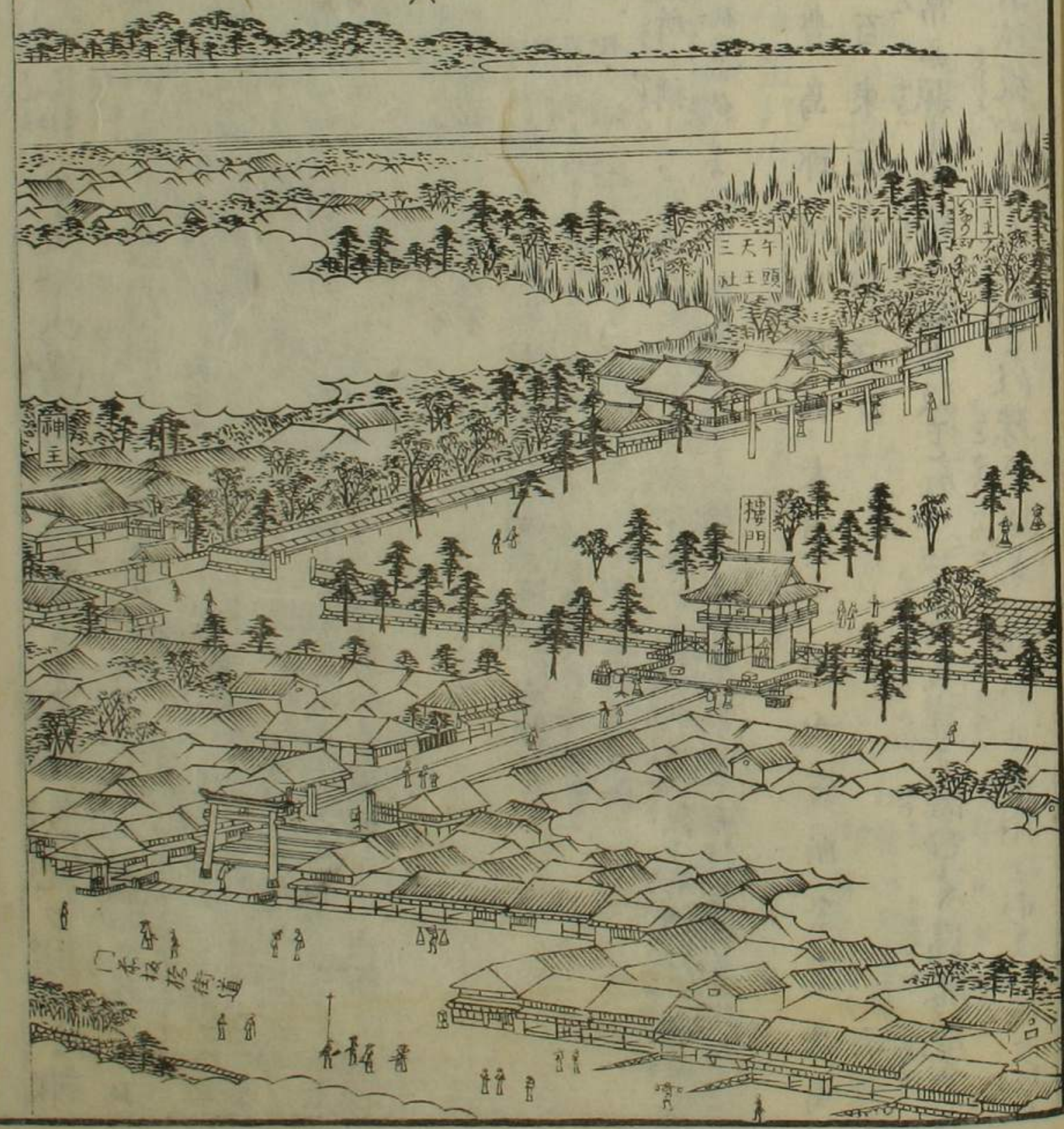
か

夜半

あり

う

右田  
持資





元和二年又今の湯島にうつさせらる其儘奮號を用ひて神

祭禮隔年九月十五日 江府神社の祭礼の永田馬場山王

神事能 隔年九月十五日祭の

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

神事能 十六日真行を神前

萬昌山圓満寺

湯島六丁目あり真言宗みして岡山を本食義高上人

なり奉尊十一面觀世音如意法尼の御化あり

み六親音を安置に當寺に世に本食寺と稱す

寺傳曰岡山本食義高上人を覺滿と號は足利十三代將軍義輝公の孫

義辰の息あり 義運の子孫あり日向國に産み幼より瑞相あり小仍て出家し

肥後國佐土原の福禪寺に入り覺深師に隨從し本食と稱れり寛文八年衆

生化益のため東奥より下りあまねく靈地を請ひて堂宇を建立せ仁和

寺宮道永法親王此事を聞し召れ感稱ありて傳燈大阿闍梨權大僧都法印

お任せらる其後西園に赴くの頃も大に奇特を顯し延寶三年十月都小上り

堀河姉小跡多門寺に止宿者し頃微疾を患へ同四年正月廿一日自臨終の

期を知り時み諸の菩薩來現あつて示して曰唯今ハ汝ハ臨終の期也

らば早往生せんと思ひ猶大願成企普く衆生を化益せんと云 仍同五年

彌生の頃最美觀たり

風土記曰豊島郡江戸神社大寶二年壬寅所祭素盞鳴

尊也神貢百束三字田云云

當社の境内常お賑しく詣人も多し茶店各崖に臨むと遠眼鏡を

を出して風景を眺むのなるごとく殊更近來ハ瑞籬み椽樹をあまた植たれ

祭神 五男三女 八王子と稱し六月五日大傳馬町旅所(神幸同八日に歸興あり

素盞鳴尊 大政所と稱し六月七日南傳馬町旅所(神幸同十四日に歸興あり

寺稻田姫 本御前と稱し六月十日小船町旅所(神幸あり同十三日歸興

社家の説小大政所と稱して南傳馬町の旅所(神幸あり同の則風土記に野謂江戸神社之

と我故に祭祀の砌舊例よりと 御城内大手の橋上より奉幣の式あり其舊地あるに

依りてと

依りてと

依りてと

依りてと

依りてと

依りてと

依りてと

依りてと

依りてと

依りてと

依りてと





神田明神

祭禮

隔年九月十五日

執行山氏子の

町くまを練物車樂

出陣中おも

大江山凱陣

牛若丸奥加下

朝鮮人來朝の

おと孫子遠近に聞て

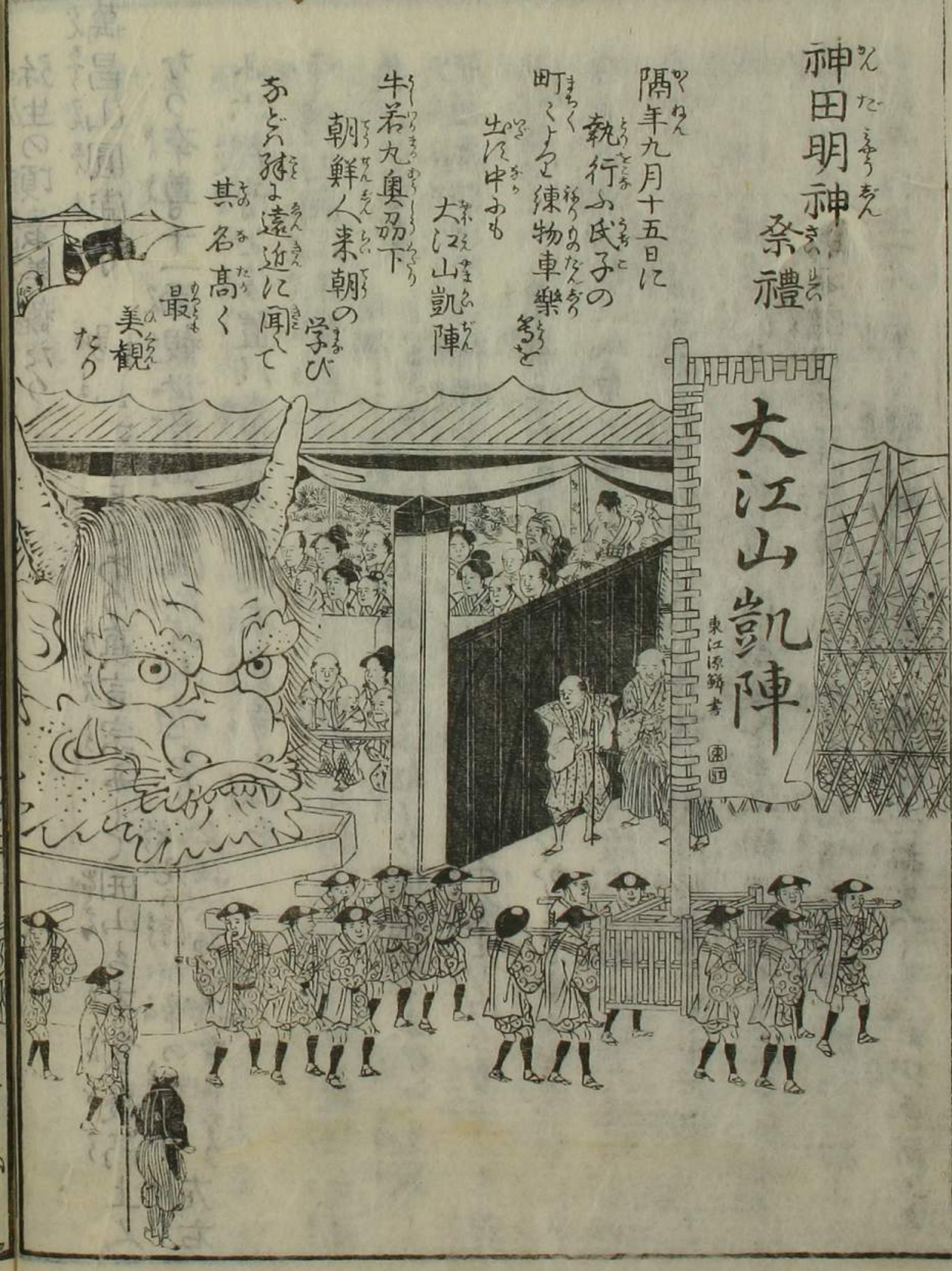
其名高く

最

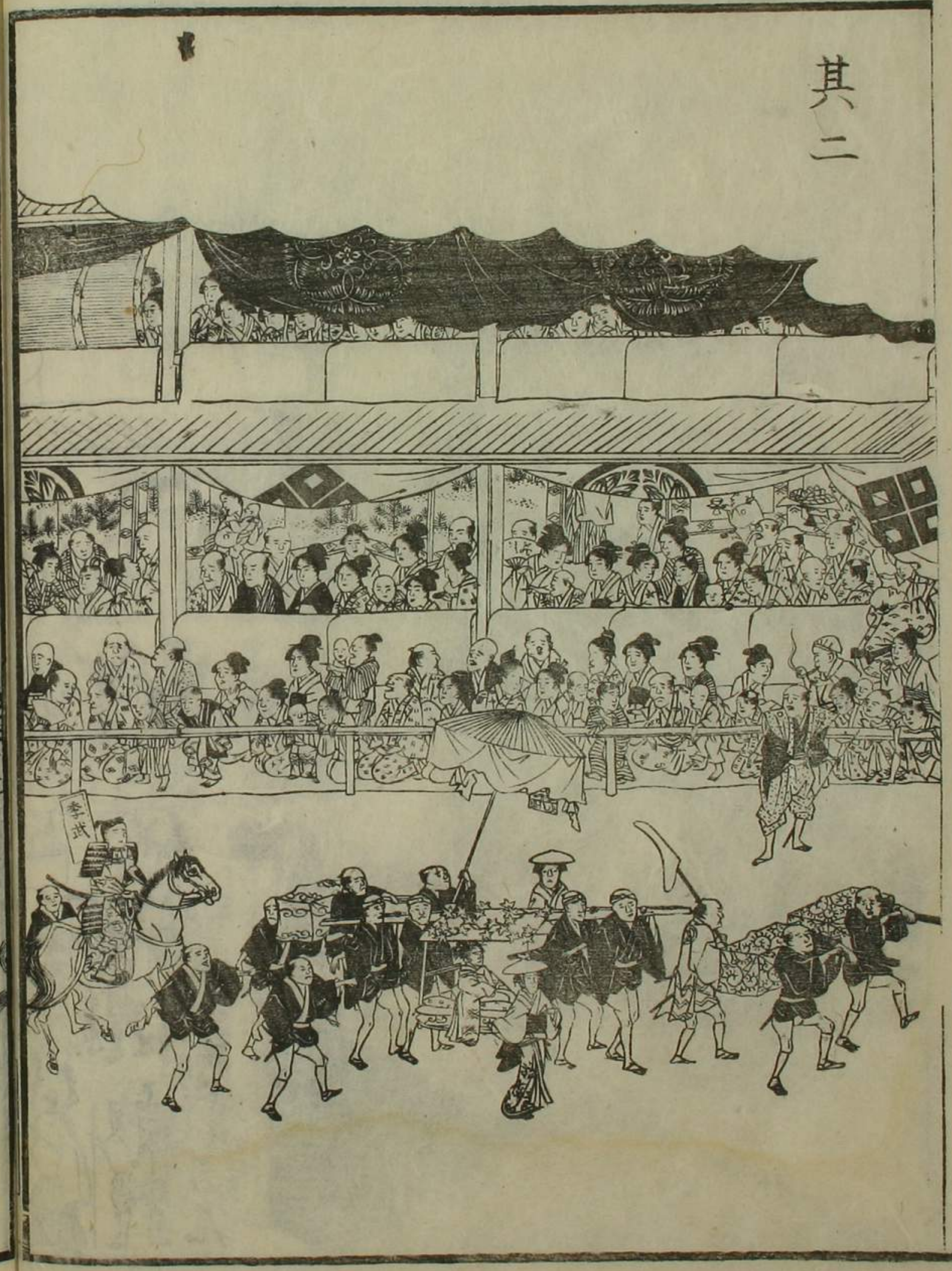
美觀

大江山凱陣

東江源齋書







花  
考  
大  
名  
宛  
を  
手  
入  
糸  
可  
七  
嵐  
雪





其三







其四





圓満寺  
俗は木食寺  
と云ふ



江城湯島の地に至り彼佛の教を随ひ諸人れ求に應じて無量を願ふ  
 成就一太の靈験をありて同七年御室宮へ参るは行法の嚴重なるを  
 御感あつて高野山光臺院の住持職に任ぜられ又天和二年七月十三日  
 参内を頭中將隆真卿の傳奏あつて光臺院住持職勅し應じ國家安  
 全寶祚延長を祈奉るべき旨倫旨被賜ふ祖先の忠義に仍て名宗の又元  
 祿四年志願によろしく光臺院を辭して江戸に到り本郷三組町に住せり  
 其頃  
 大樹 常憲公とて一淨光院殿頂山女を以て御祈禱を仰附る室永  
 六年上京は此時昇殿を許され同七年江戸湯島の地に梵刹を建てる  
 萬昌山圓満寺と號し  
 大樹 文昭公の所志願より本多彈正少弼忠晴奉行たり則上人を以  
 て當寺の開山とて享保三年六月七日化縁の誓盡く終り春秋九十五歳  
 ありて遷化す以上開山傳の  
 器と譽



寶林山靈雲寺 大悲心院と號以圓滿寺の小北方にあり關東真言

律の惣奉寺ありて覺彦比丘の因基なる

灌頂堂 兩界大日如來を安置以

大元堂 灌頂堂のうしろ方丈にあり奉尊大元明王の像ハ元祿大樹の清筆ニ

朝の後美和二年奏聞を経て小栗栖の常曉阿闍梨唐土ニ

怨等の書見えり又延喜式玄蕃寮式曰凡大元明王の御法毎年

鐘樓 覺彦和尚自銘を依る

寶林山靈雲寺 鑄鐘銘並序 武都北郊有一勝地四埜廓落四方之衆易來而投

擁一丘崛起一天之星可坐而算菅祠良聳神鬼常作

從四位下柳聖堂前靈岫遙為鎮護東嶽天澤後聯鐘梵

府堅請伽藍之地以囑貧道遂使今茲仲秋之二十

大將軍下旨賜許斯攸予乃夷榛莽卒勅營構遐邇

競趨緇白佐助自閏八初二始斧以至於孟冬之半土

者時之績倏示告成從四位下牧野備後刺史源成貞

鉅鐘之復令工匠也締造其樓今月初四樓鐘偕就以惟

斯寺之興起也者本是樓今月初四樓鐘偕就以惟

大將軍之興起也者本是樓今月初四樓鐘偕就以惟

感于茲欽遵佛制力荷醇信之所致也予欲使後生有

以增士民壽福也乃為銘曰 元帥資地 實比布金

城北福庭 山號寶林 彌歷七旬 棟宇成森

作夫四集 役工日臨 命工作器 修弁合程

架樓突兀 效響鏗鉤 迷夫天眞 龍鬼熱醒

聲雖本有 乍起乍減 法音遍益 何有垠埒

圓性融相 誰縛誰泄 地藏菩薩 弘法大師あり

元祿四年辛未年孟冬 法音遍益 何有垠埒

地藏堂 奉尊地藏菩薩 法音遍益 何有垠埒

開山諱淨嚴字覺彦妙極と號以河岳錦部郡小西見村の産

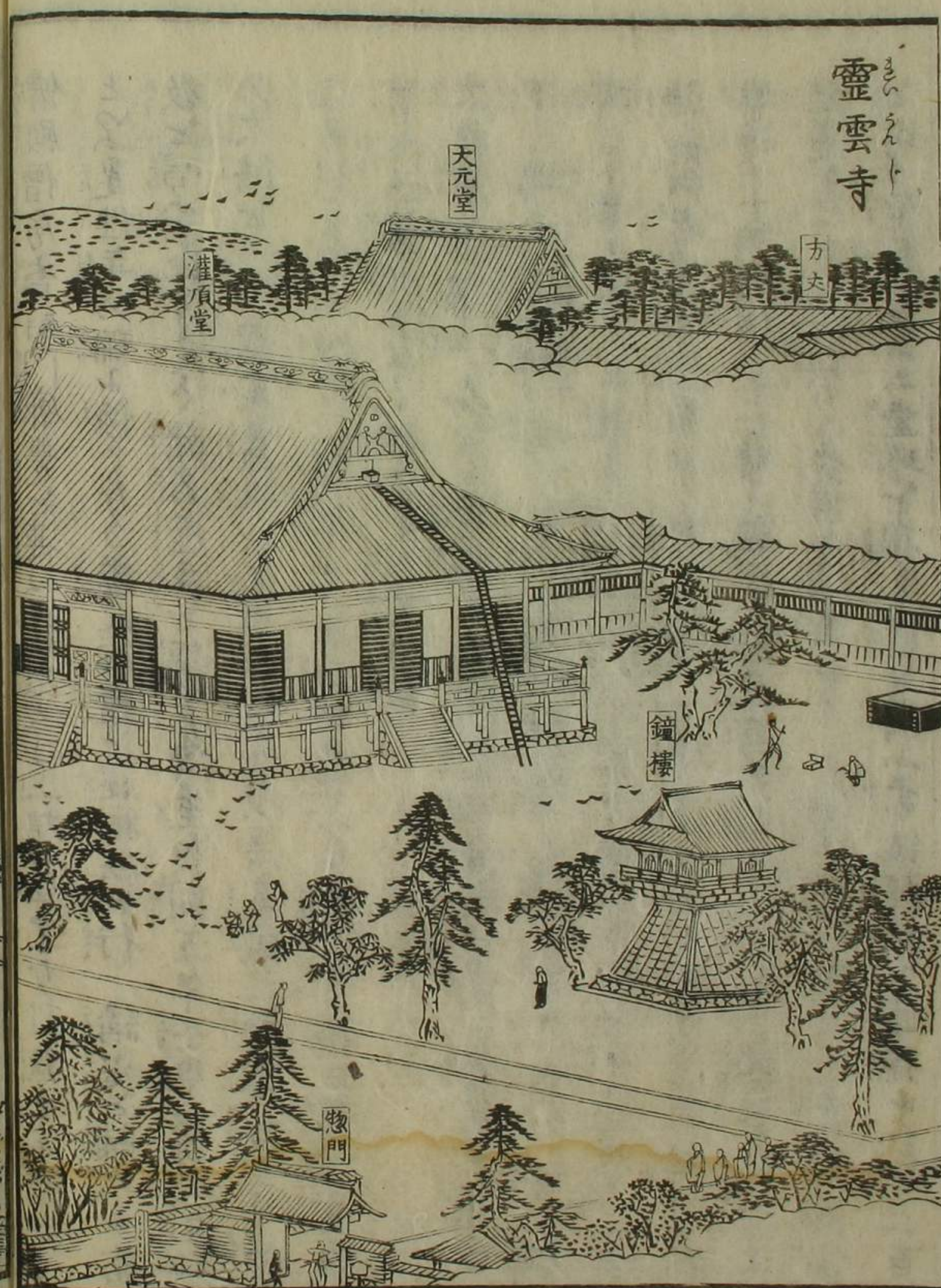
團氏母



秦寛永十六年己卯十一月廿三日に生ふ四家少て普門品尊勝大  
陀羅尼誦詠奇標穎悟夙因の發する取之凡耳目の歴る取終遺忘の  
事なく衆人是を神童と稱す慶安元年戊子高野山檢校法印雲雪が禮  
して雉塗を昔に年十歳朝參暮詣倦事なく紀昶亞相公頼宣卿一度  
見たすひく深く是は器ありと真みされ方外千里の駒なりとの言ふ  
遂に真言の諸流に秘奥を究む又餘暇あかると孔老を以諸子百家  
歴史等涉ぎ終ると終る常は法戦の場も臨に向ふ取敵か一貞享  
甲子冬錫を關左に飛に其曉瑞雲ありて東を指其色赤黄みして長さ  
と數十丈され和尚の法化將み東方に振んとするの兆あり一度東都  
ありてより法報江城の下に震ふ仍多和尚の道香公慕ひ弟子を禮  
設厚くされ遇はる輩をこれに元祿四年  
大將軍常憲公召見し多ひ普門品を講せむ雄辨泉の流あかどく聴者  
欣然とて善と稱し遂に城小くして地を賜ひ梵刹に經始にすよとひく

佛殿僧房香厨門廓薨を連れ巍然として一精藍をたれ號く靈雲寺  
とて是往年の瑞は依りたり遂に密檀を建秘法を行講筵を鋪之密  
教を唱ふにきん諸名匠衣と摺て來り至同五年壬申六月大元帥  
の大法を修し國家昇平を祈ふされより以後毎歲三神通月七日後  
法を終ると永規とて翌年多麻郡の戸若子を割て香積に元開東真  
言律の僧統となしたまふ又乙亥夏  
大將軍常憲公より齋戒し多ひ大元帥金剛の像を畫き本尊に  
下賜し安置し奉ふ同十年丁丑僧俗の請は依り曼陀羅を因く檀  
場に入者九万人み幾し隔年灌頂を行ふ既元祿十五年壬午六月廿七日  
諸徒召遺誠懇懃なり我今法界三昧入といひて恬然とく順化に  
世壽六十四僧臘二十七時は顔四十許色相怡悦とて平生は勝る師常小  
弘通を以て己が任と受取の財帛を一一貯えは又みまらに費さば佛像  
を造り聖教を索め堂塔を構貧窮を濟み茶後經論を講説せりと二百







妻戀明神社



三十六會殆三十席秘軌と授ふこと五回著述を於所の書三百卷余度  
 於處の僧尼四百三十六人具足戒を受ふ者十有三人阿闍梨を得る者二百六  
 十八人受明灌頂ははる者千六百三十一人菩薩戒を受ふ者一萬五  
 千人其余の法化の奉て數少くは往哲のいまま發せざるを發先賢  
 名明ならずはふはあはれは法化洋々として天下に彌布し王公と  
 下愚夫蠢婦に至る近敬仰せむといふことあり今古のむとあはる所  
 實み総持復古の師なり 以上當寺開山傳の要を摘ぶるに記す  
 妻戀大明神社 妻戀坂の上にあり万治年中回祿あつて後今の妻戀基  
 み遷らせしに

祭神 第一殿 倉稻魂神 第二殿 日本武尊 第三殿 弟橘媛命

社傳曰當社を往昔日本武尊東征の頃此行宮の地ありと云々  
按に日本紀より日本武尊東夷征伐の時妃弟橘媛海水に入て吾妻川に流るるに於て  
 登る東南の方と望たまひ吾妻川に流るるに於て見ゆるに此地も東  
 征の時此行宮の地ありといふは傳と傳奉る妻戀意慕ひたまふの意を取て直る



妻戀明神と号すカ多し今稻荷明神をりつと社の號よ  
稱す後と云えとをせしむる後世合祭せしかりつと云

往昔社地も妻戀臺の下にありて境内をれる廣くりに救度  
忠兵火小罹り大に荒廢よき比繞り社の形をりて致せり時よ天正  
年中

神君當社よ祈願の事ありて新に二丁四方の社地を賜ふ又寛永五年

台命よと云

神君の御像を別社に鎮座おさし先給ふ  
今稻荷の社は鎮座を奉るとり

湯島天満宮 妻戀明神の小れ方あり太田道灌江戸の静勝軒より頃

文明十年 夢中に菅仲は謁見せ翌朝外と菅丞相親筆の函像と携來る

者あり乃後中津を其所の尊容を彷彿せり以て直に城外の小に祠堂と

管彼神影と安置し且梅樹數百株と栽美田等と附て即當社是あり

以上諸社一覽江戸名所記等の書よ出るとりとも思ふ誤りも勘町平河天神に

菅丞相直筆の函像と稱するものありて河と當社よ此點あることか其論

北国記の  
武藏野の遠望と懸たふに寒村の道やう野梅盛り薫ばされり

忘るる東風吹むと之を遠くまあの神を梅が丸 亮惠

湯島神社 土人戸隠明神と稱す奉社の後れ方あり則比主の神あり

風土記曰豊島郡湯島神社雄畧天皇御宇二年癸巳

天澤山麟祥院 同所北の方よりあり臨濟宗江戸四箇寺の一なり

恩山天澤寺と稱せしが春日局の奉尊の釋迦如来同山に滑川劉和尚

法師と取て麟祥院とあり春日局あり 三代大將軍の乳母人齋藤利三の

京師花園妙心寺 奉願る春日局あり 三代大將軍の乳母人齋藤利三の

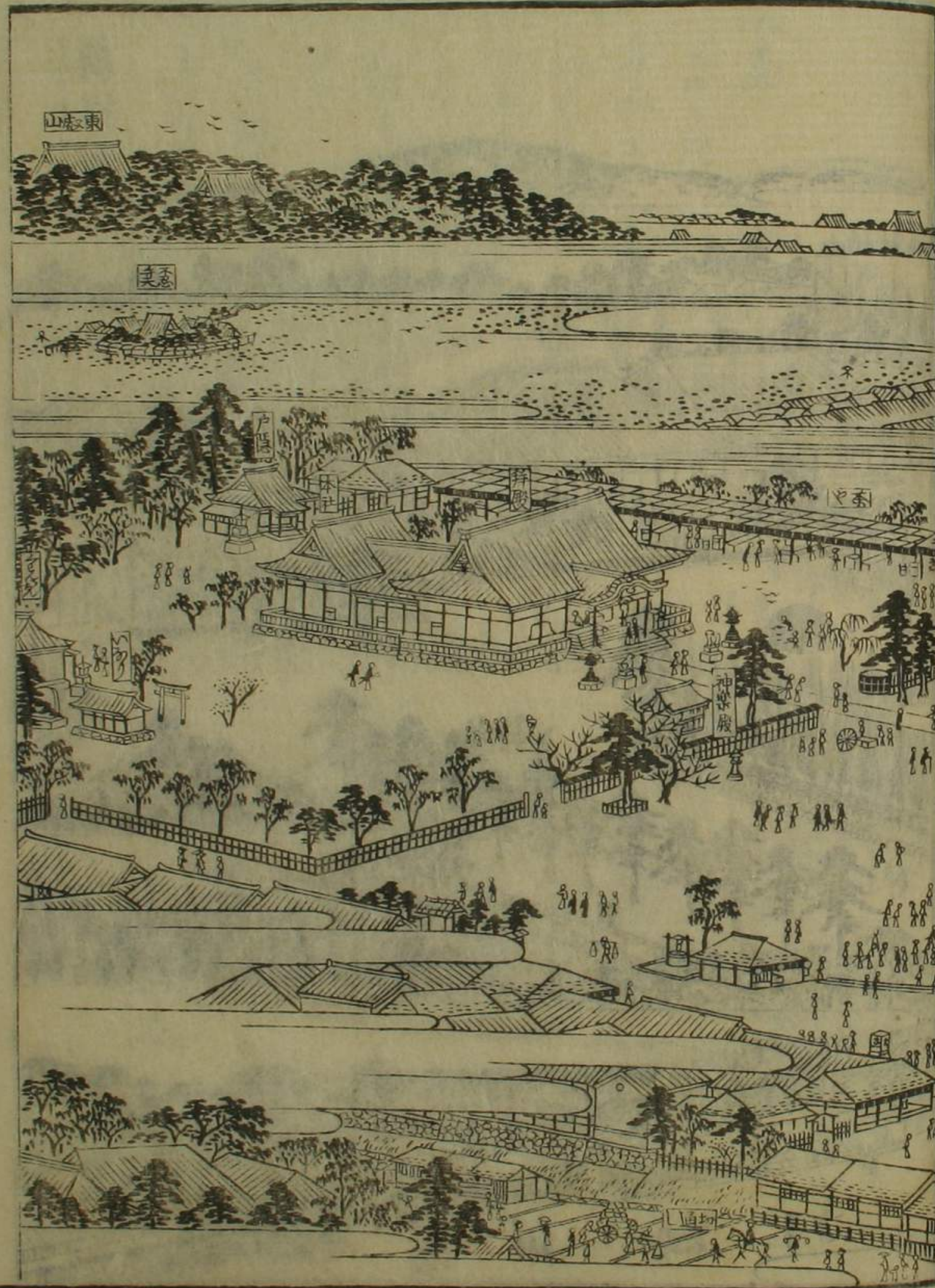
寺傳曰寛永元年甲子 二代大將軍の命よらて當寺を春日局

を菩提所とす且其殿閣をあら移し 天和二年回祿を其以前の禰今十八

等皆雲谷 同五年 三代大將軍 不豫よありせられしとれ局自ら

東照大権現の 神前よ詣ぐ禱て曰妾が身不浄ありとても苟も乳



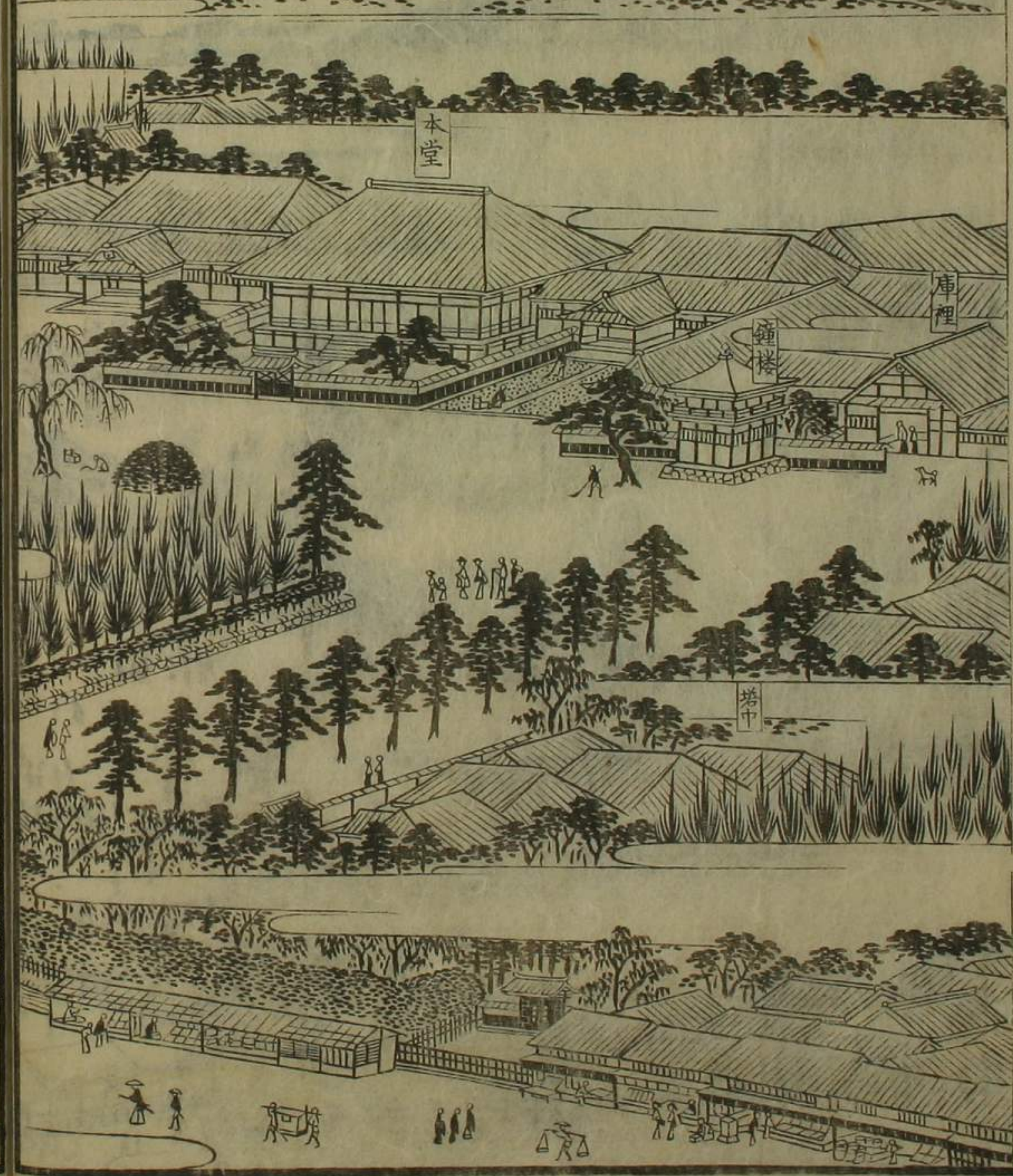




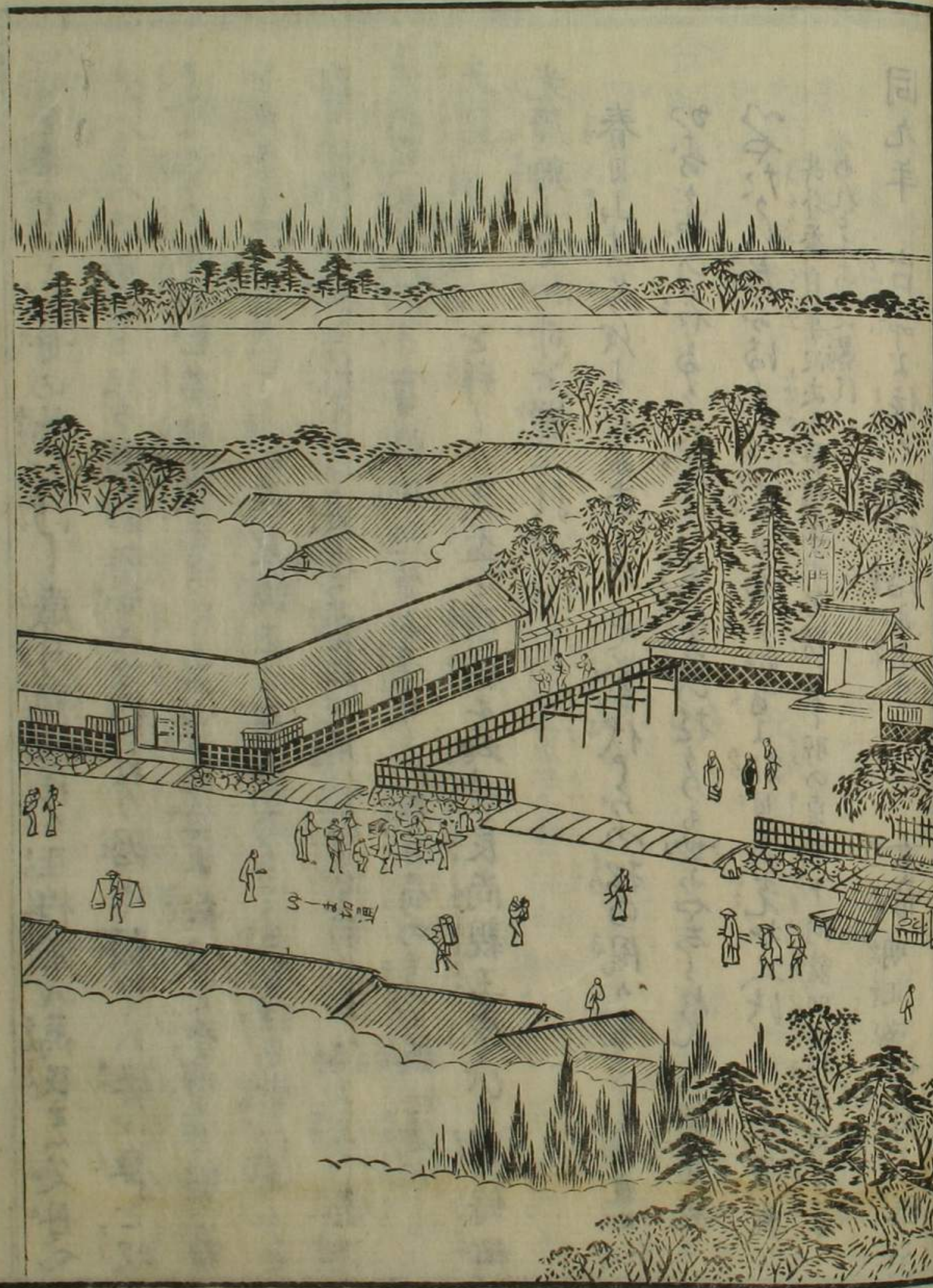
以屋  
 多うん  
 きんみの  
 わくまの  
 山  
 朝日れ  
 光り  
 鳥九光廣卿



麟祥院







根生院

本堂

方丈



味を奉る乳母の称を汚し歳月祠奉れり且將軍の萬民を父母之  
若今大故あふれぬ國家の安危にわづらひ願ひの妻が身を以  
是に替り奉らむ若快復あらしむ忽に身も病苦を受誓て醫藥  
を用ゐしめて死せむと云 其衷誠正に感應ありて日を経て常にあはせ  
たまふ仍く身を終ふまで針灸藥餌を用ひて同六年洛より春内  
以西三条大納言實條卿兄弟準せられ春日局の号を賜ふ遂に  
天顔 後水尾帝と拜し 天盃を頂戴を此時良尚親王あはび實條卿  
光廣卿より和哥を贈らる

春日山其名代よもあはらして新代よも松の風も 良尚親王  
かまが世の名あはれ名より紫代よの松も世あはらねん 實條卿

心たぐれ君のほのりれ本日るはひまは朝日を光せしは 光廣卿  
其外奉白集に丈山長嘯子よを賜らる野の東都下向餘別の和哥詞書等  
あれどもまに畧に

同九年 台命は依り再び洛より 女帝 明正帝と拜し奉ら

後勤勞歸休のため代官町に宅地を賜ひ從二位叙せられ  
景堂 奉堂のたよりあり二位局の親影を置此像の 台命に上りて狩野探幽局  
大將軍 命せられあつて唐草の純子に正壽の字を織入り毎年九月十四日忌  
時たふし園に法燈を刻き奉詣を免に

金剛寶山根生密院 延壽寺と號を同東の方にあり真言新義江戸  
四箇寺の一にして寛永永れ始 御祈願所に 命せられ奉尊藥師如  
來の佛二春日作脇檀に十二神將の像を置榮譽法印 春日局の  
猶子あり 松之川

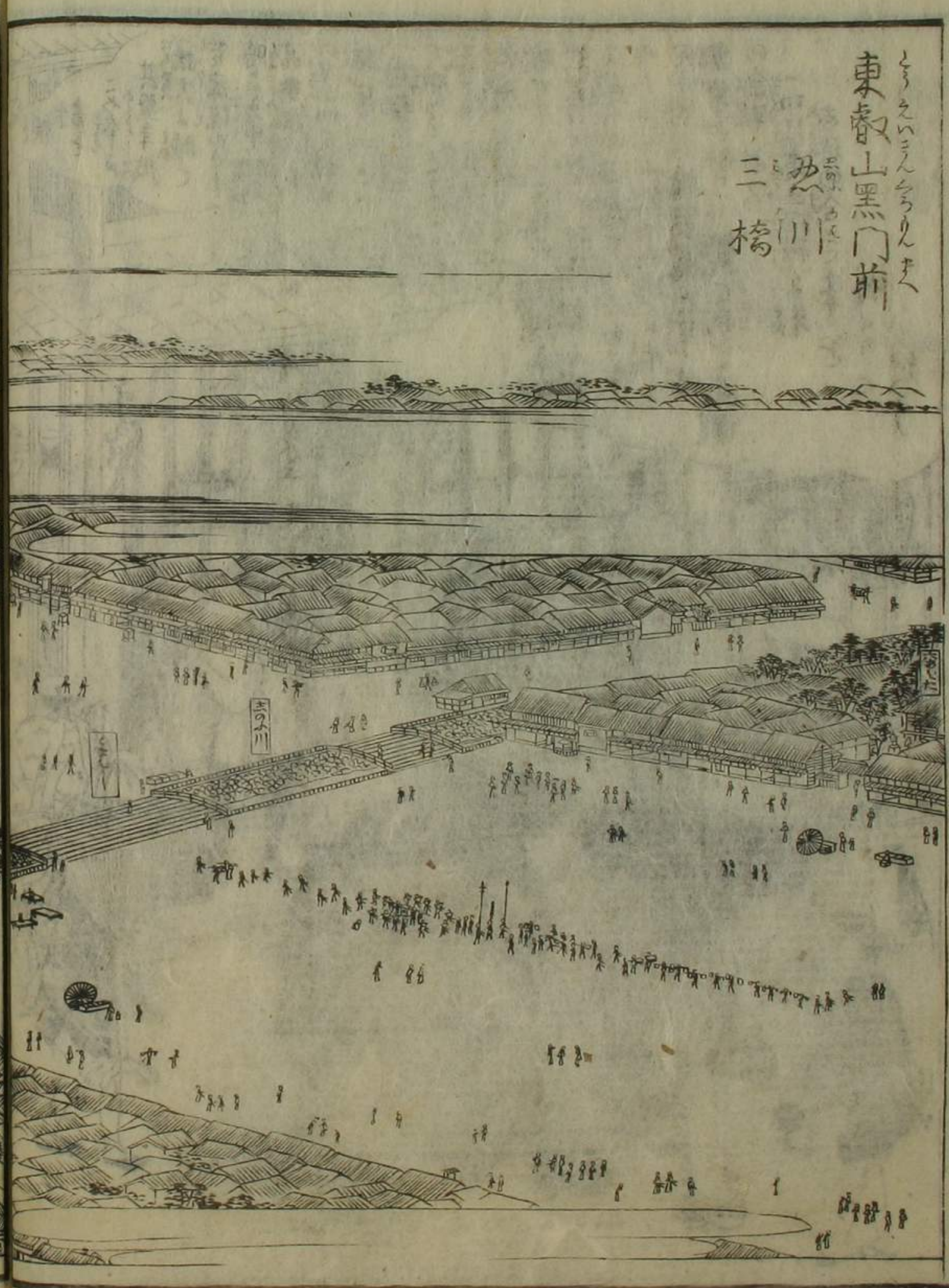
不忍池 又篠輪津 東叡山の西を麓あり江州琵琶湖に比を 不忍と名に  
廣方十丁許池水深ありて早魃も涸るに殊に蓮多く花の頂に紅白咲亂  
天女の宮居のされし蓮の上は湧出するが如く其芬芳遠近の人乃袂を籠る

風土記曰豊島郡篠輪津池貢鯉鮒鰻魚鴻雁鶴鷺  
鴨等周行十里許程早日水不涸霖雨不爲害祈旱  
兩人詣于茲所祭瀬織津比咩也云云  
中島辨財天 不忍池の中島あり當社を江島竹生島のうらみ



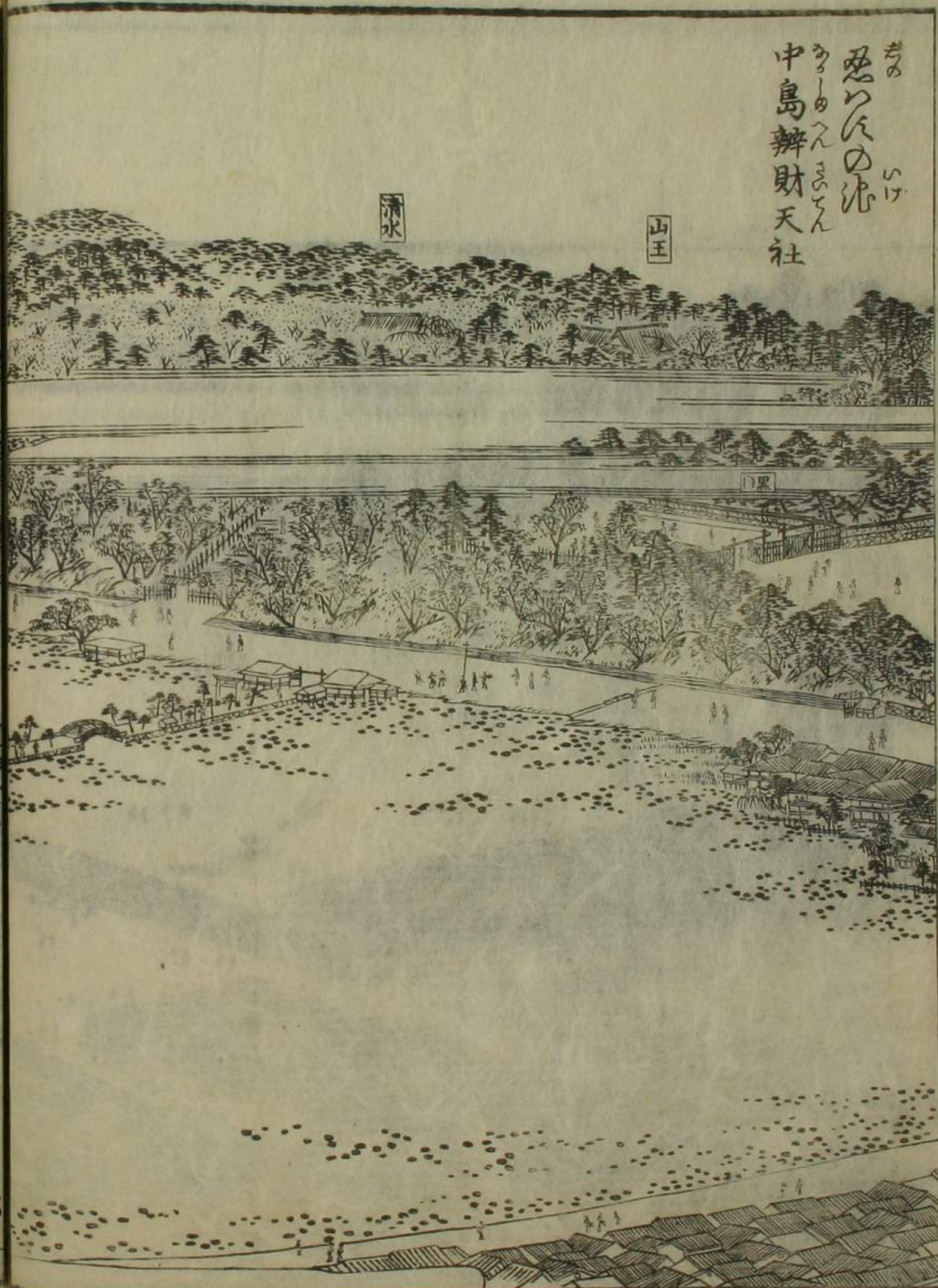






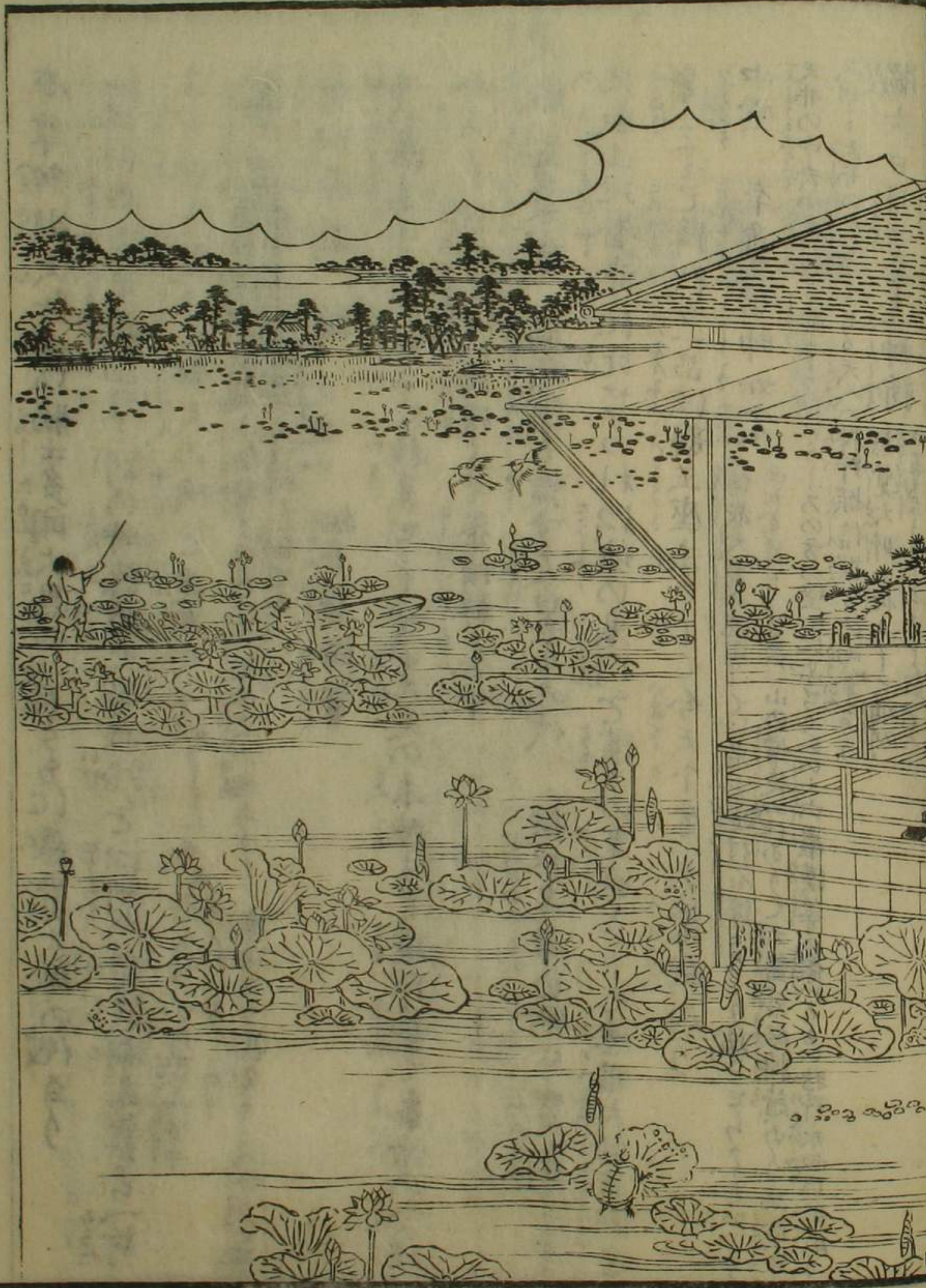
東叡山黒門前  
三橋





きり  
あつたの池  
ちよん  
中島辨財天社





ちのこをのいけ  
 不忍池  
 蓮見  
 ちす

ちのこをのいけとよらる  
 不忍池は江戸第一の  
 蓮池なり夏月には花  
 弁糸露々として水上  
 又番行の花は紅白  
 色をとりて芳々人を  
 惹き小蓮をもちする  
 の華凌展と採文  
 の清観とす



奉尊辨財天と云ひ脇士多聞大黒の二天とも慈覺大師の他あり

社傳曰往古東叡山草創の時慈眼大師此池を江列の琵琶湖みそら新

又中島を筑立て辨天の祠を建立せられと云 建名取記云水谷依母井

聖天宮 本社の北の方小島小勸請す此島其始天の祠あり 舊池あり其頭もこの聖天の宮

紫銅華表 額 天龍山 細井廣澤筆

昔の離島小にて私めて往末せしを寛文の未陸より道成築て奉請の人便

わらへび己巳日の前夜を奉請群集す

東叡山寛永寺 圓頓院と號す人皇百九代 後水尾帝の御宇寛永年中

比叡山延曆寺に比せられ江城の鬼門を護るの靈區として慈眼大師草創有

中堂 奉尊藥師如來 傳教大師の他中にて加夫遺村石津より移せられたり

脇士 日月二大主三神將 慈覺大師の他より羽列

賜壇 不動明王 智燈大師の他 多聞天 定期の作

# 瑞瑤

靈元法皇震筆

竹莖 席門のうらたにあり昔慈覺大師入唐の時五臺山の竹を根らに携へて帰朝の  
あつとす 盧尾にあり書を見えたり此に竹と山玉推況を以八百萬神の影向不あり  
ともとり又同一た在り小き塚あり石楠を植きり諸夜又夜又女の影向不ありと

# 寛元堂

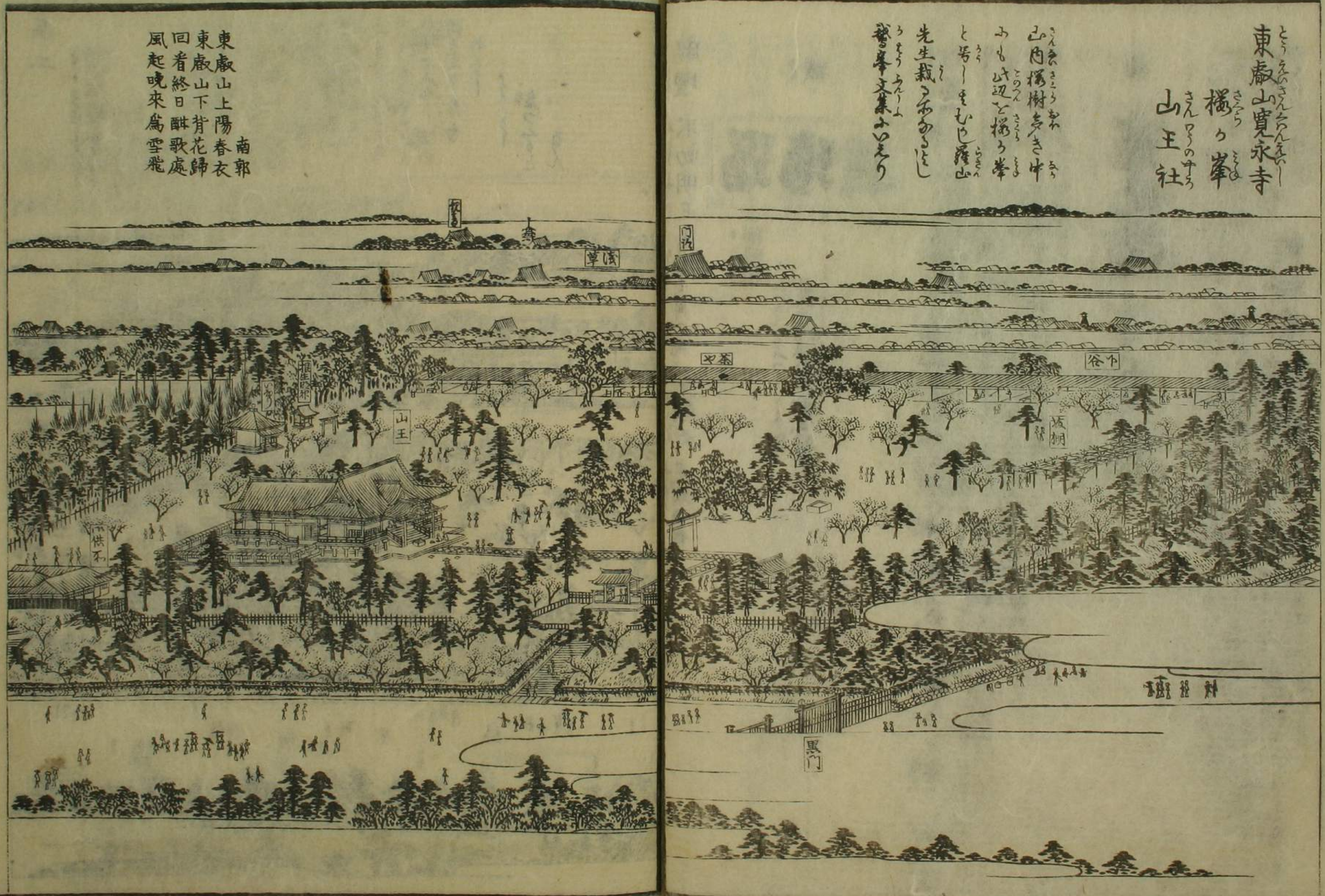
後水尾帝震筆

雲水塔 中堂の前の方にあり多宝塔と号し後水尾帝の勅修なり 二十番神社 雲水塔のうらに有  
定山慈眼大師建立 轉輪藏 中堂の前の方にあり一切徑を収む前に傳大士を以普賢  
ありと云ふ



東嶽山寛永寺  
 櫻ヶ峯  
 山王社

山内櫻樹多き中  
 小も山辺と櫻ヶ峯  
 と号しむじ嶺山  
 先生裁ふあふじし  
 警學文集ふり



東嶽山上陽春衣  
 東嶽山下背花歸  
 回看終日酣歌處  
 風起晚來爲雪飛

127

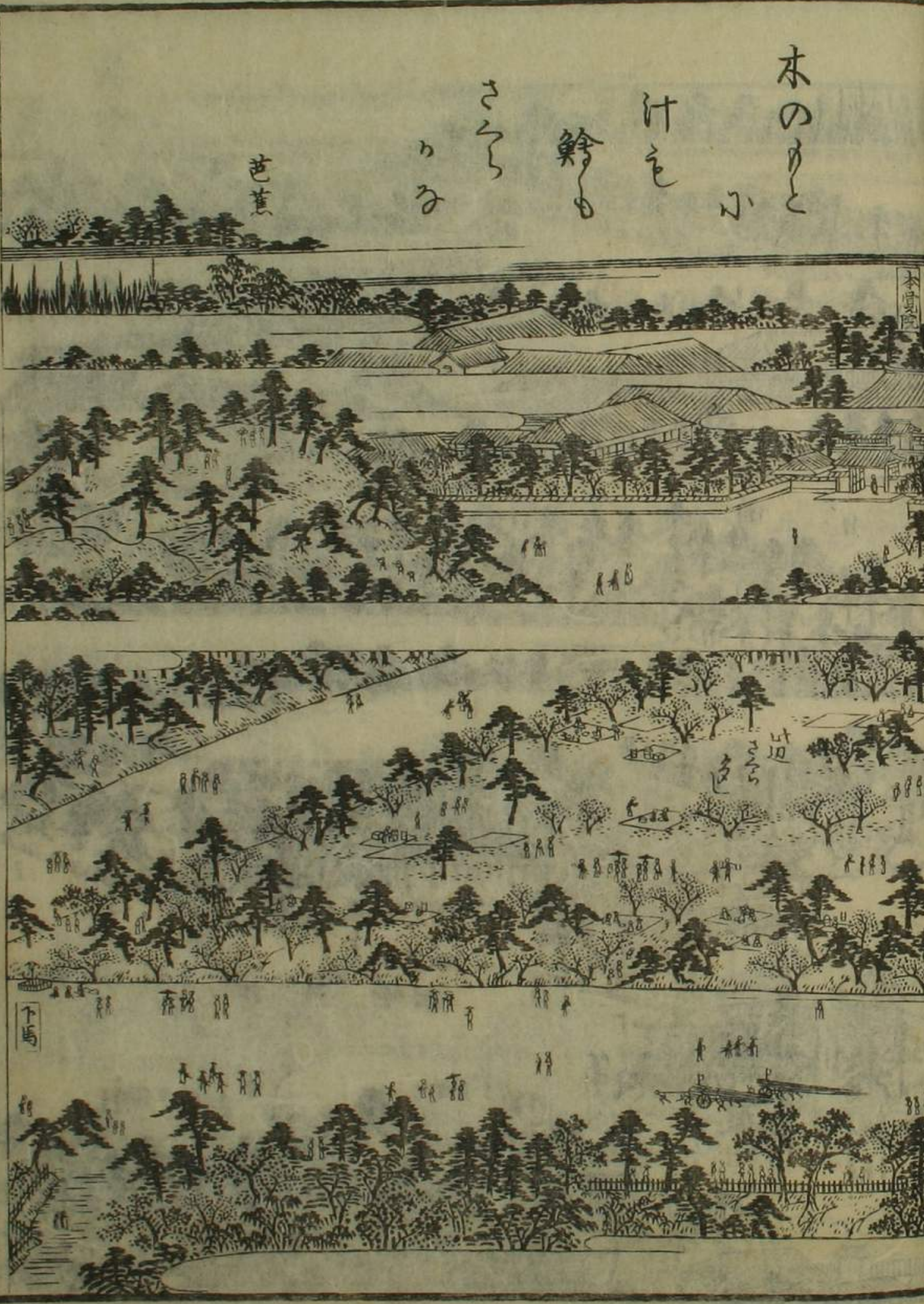


其二

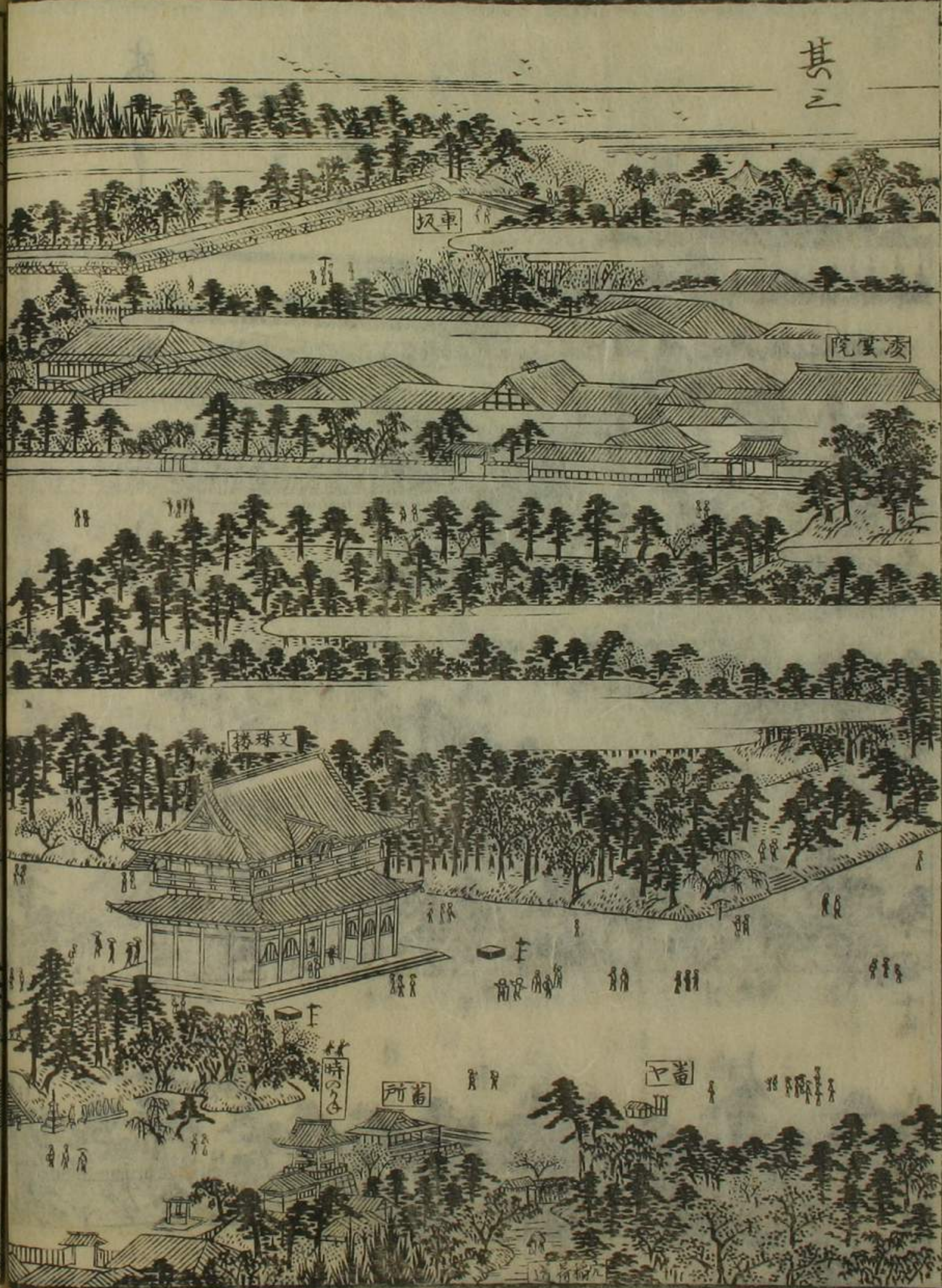
清水観音堂  
秋色楊

秋及楊の清水堂の  
仲供所擗のうら  
井の物とくらふあり  
花の一種として虎尾  
と梅すりの是あり  
中頃の府の南戸  
竹某の女秋及と  
ひるりの花のころ  
らふあり井戸の  
の福のふみ油の  
跡といふ秀か  
あり

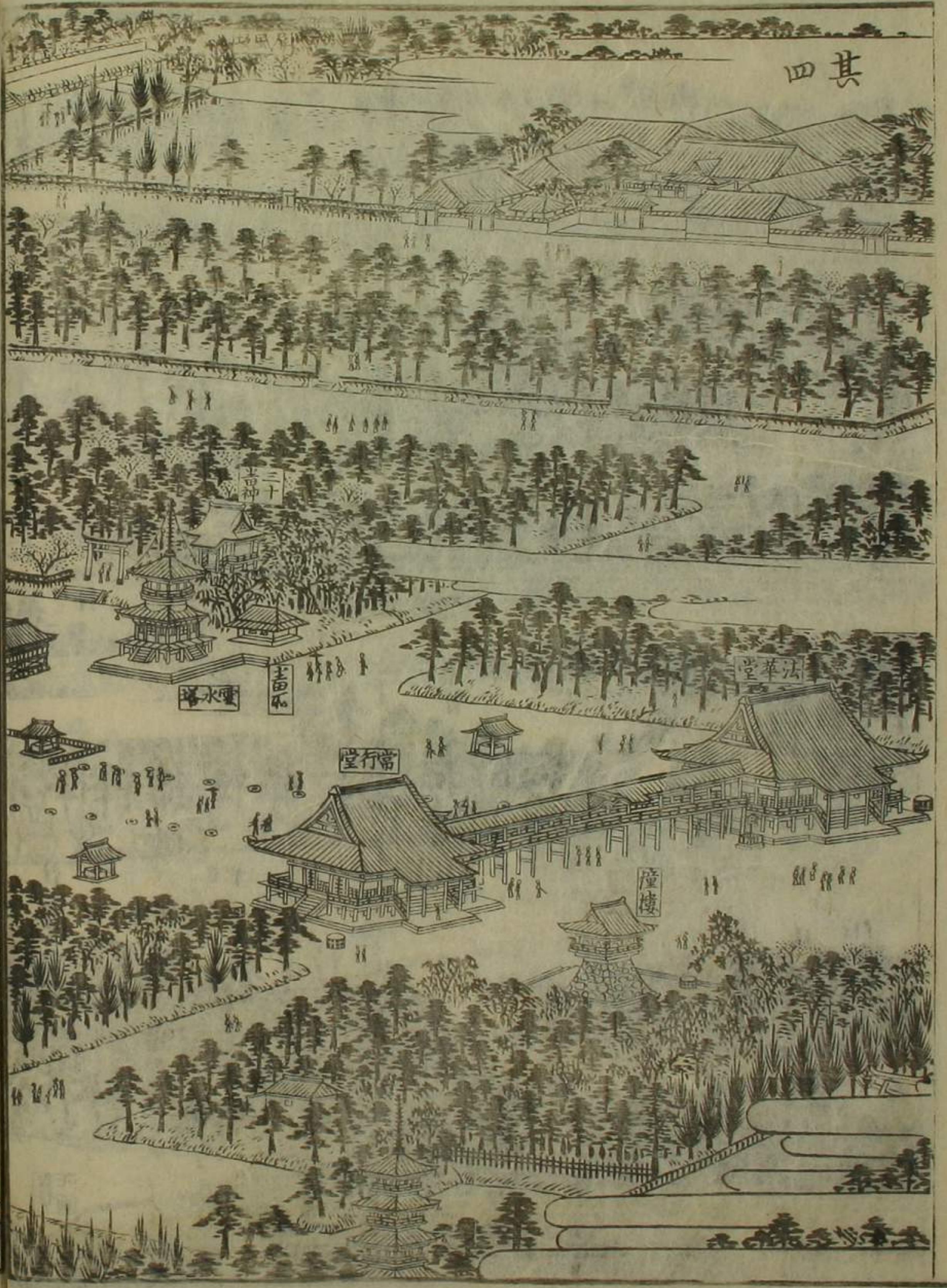
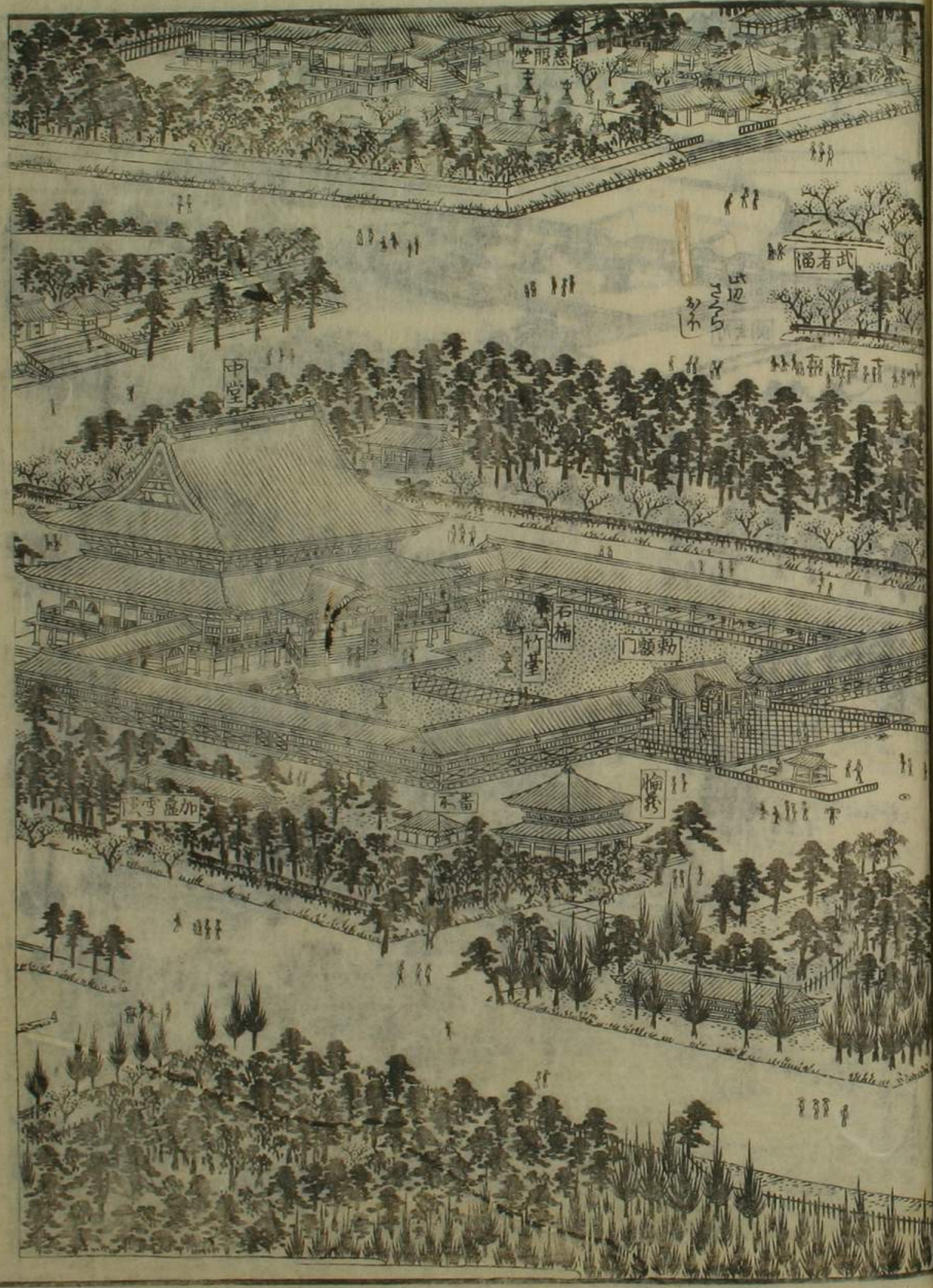
なつと  
らん







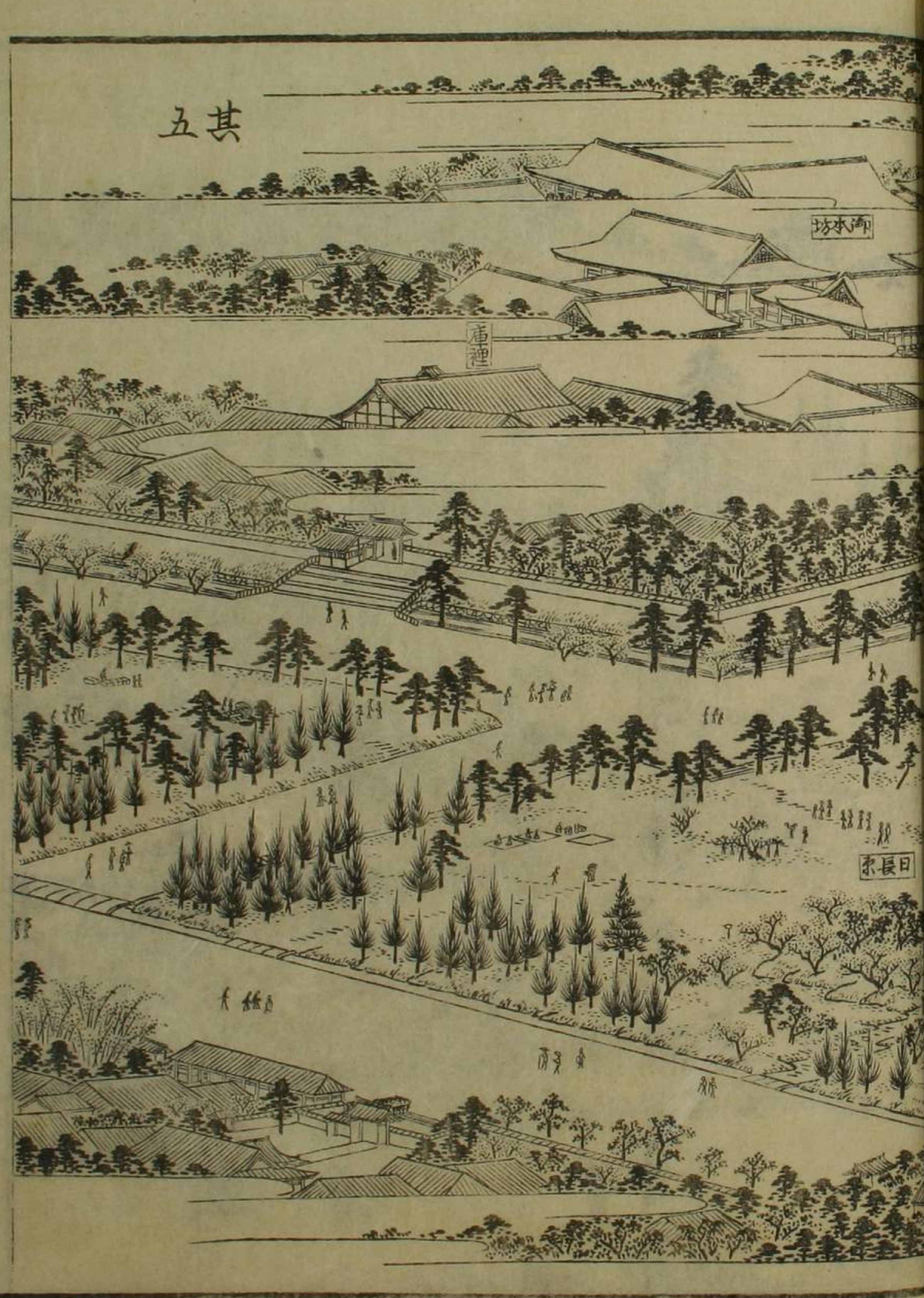




其四



五其













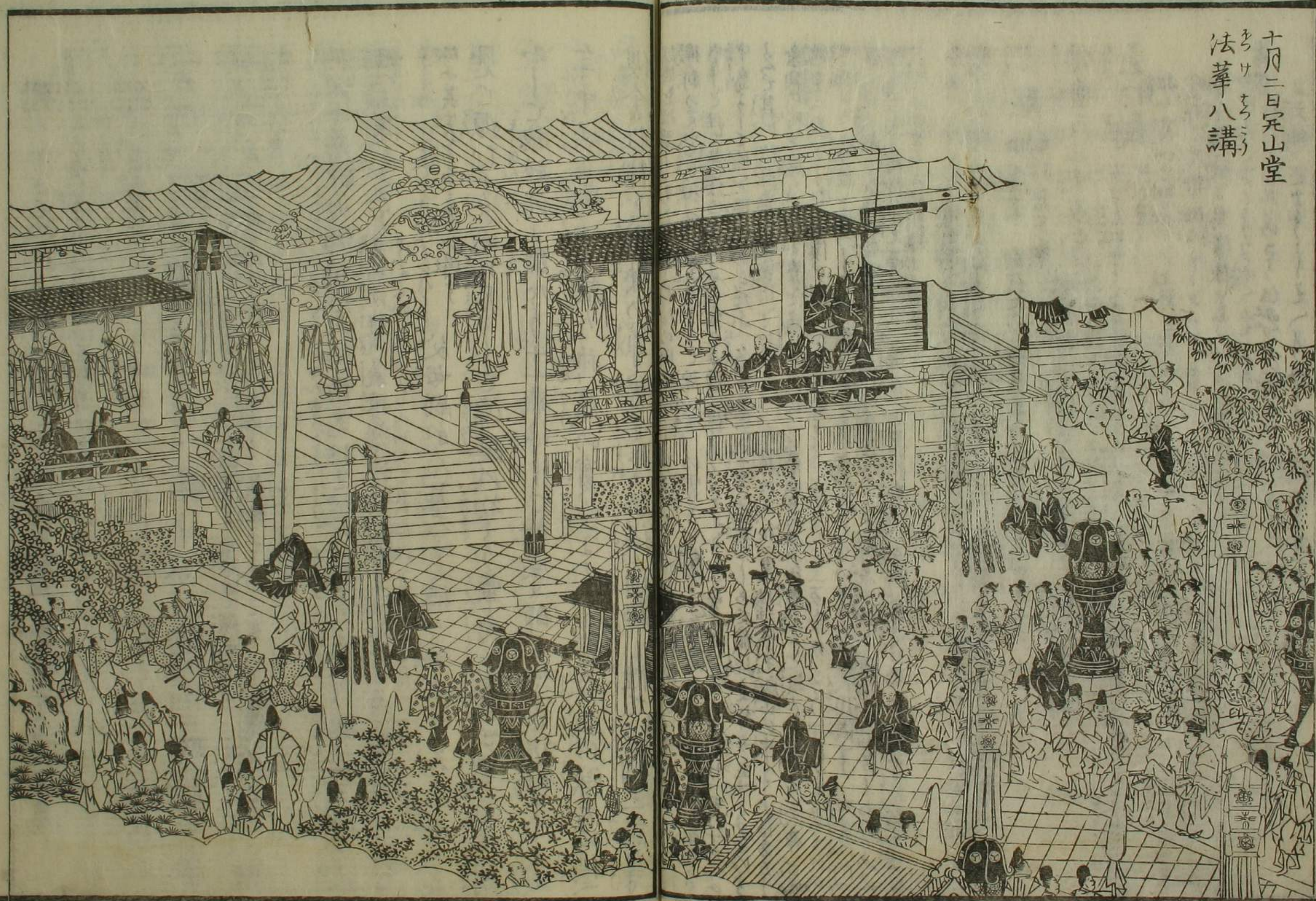








十月二日 瓦山堂  
法華八講





突りてきてたれハ、まされしゆくさまのひの園の露のまごりえ 堯惠  
圓周雜記 志のれれとて取る松原のありけふけよ

霜の後あらわれより時雨といふのひの思れねもひれ 通奥准后

二王門 明和九年の田舎は焦土となりて 東嶽山 大明院宮と辨法親王の筆

完山堂 座主法親王行導師とて洋を坊より筆興とてふけらるる一山の僧徒出仕法華八備

執行あり

柳冠山慈眼大師諱ハ天海南光坊と號す奥列會津郡高田郷の人

姓ハ三浦氏あり 是利法住院義澄の子とも或ハ蘆名修理の末裔高田の一族ともいひ

母其美とて事を得ず 父母嗣れく月天子は禱り其母奇花と香とを

見て振ひりて九月とて降誕ハ初より葷肉と食せずん清朗

少して聰敏化は然たり十一歳にして辨法言師と投して祝髪ハ天之

年中始て嶽山に登り神藏の實全よすをえて台教の深者以傳ハ

俱舍性相と園珠の尊實は學ひ復南都は往て法相三論等

の教法以學ひ成重といへる達て神道の奥儀を究足利の學校

小遊ひて孔老の書と讀道器といへる小指撈巖と學み後郷は淨り會津

の大寧禪師よあひて教外別傳の旨と發明ハ善慈和尙玉巖

集と徳一百則の話頭と會得ハ其頃甲斐の信玄名教と教ひ

ある時諸師と請いて論義せしめ天海と講主とす衆皆辭理の奇れと

感移れといふ是よりして名と朝野は知らる後常列江戸崎不動院に

住す時小文祿二年夏大は早民られて師として請雨の法を傳

せし其時神女あつて五銚村と授く師高田浦の深淵に臨むて

法を傳へるは膏雨忽注て百穀大に登る 彼五銚村今猶ほて 又慶長

四年武刃仙波の喜多院に住す同八年下野園長沼の宗光寺に

移る同十二年

神君 命して嶽岳の南光坊に住持せしめ再び命して喜多院

に歸り居らむ同十四年山門に登り法華大會を行はく時よ

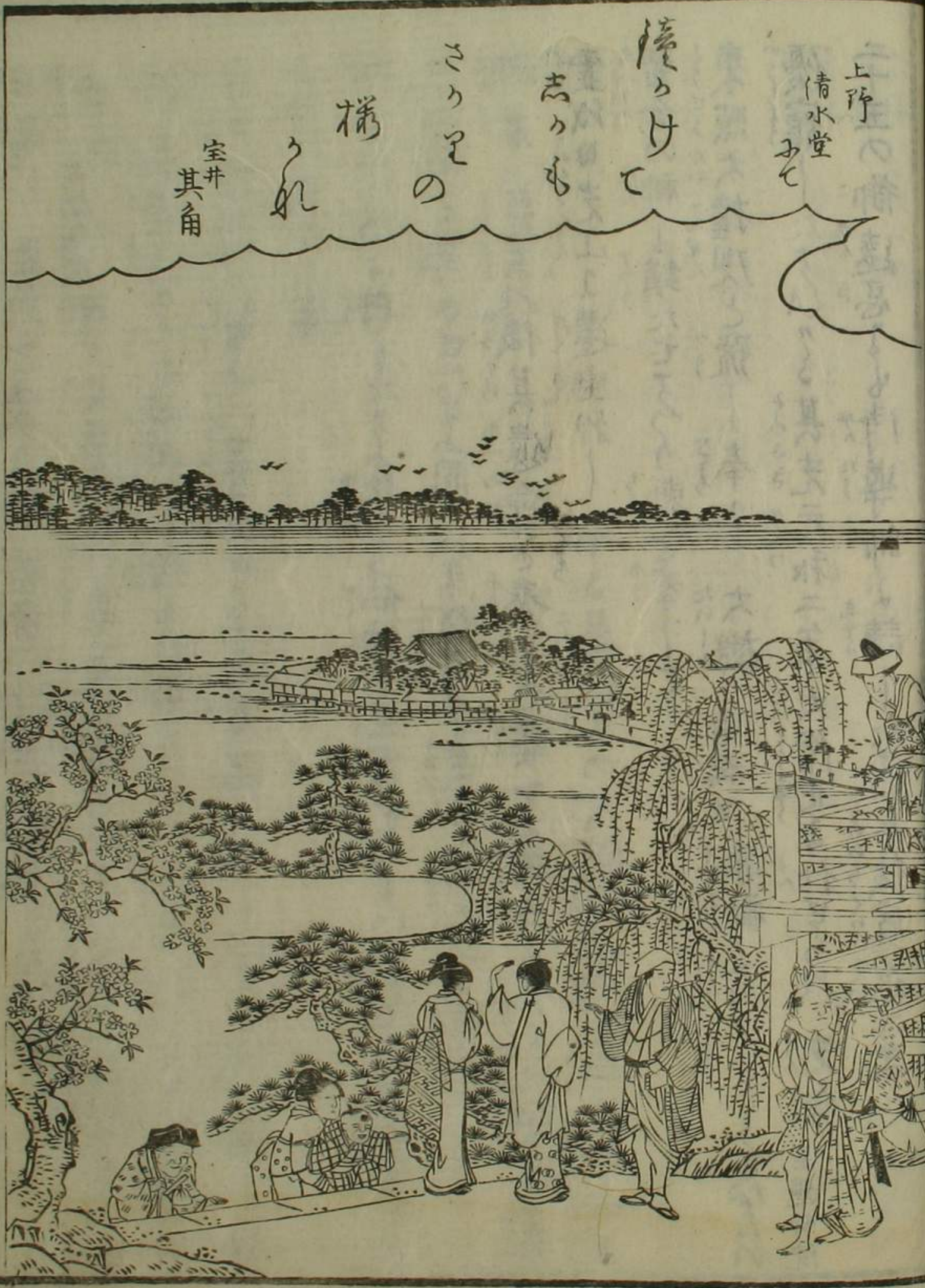


座遷師大両



月毎の海日ハ両大師の  
御影を次の院に遷座  
おしむる是を將迎  
奉らんとして口用ち道  
者人群衆と道場  
溢る實に此地熱雨  
の中最も  
首なる





上野  
清水堂  
みて

滝かけ

志も

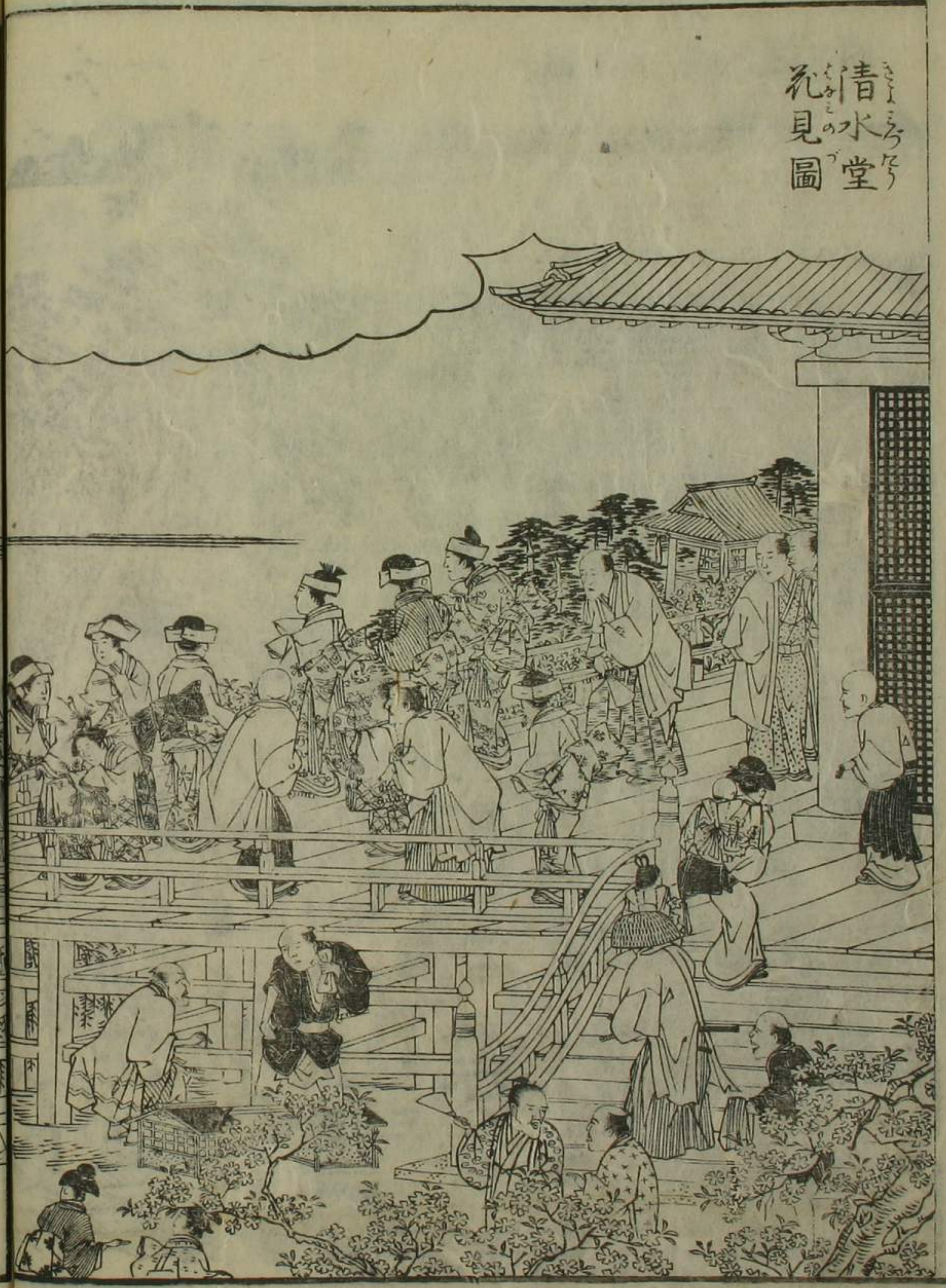
さりまの

梯

うれ

宝井  
其角

清水堂  
花見の  
見圖





重職の勅許と蒙り新題者の精義嚴重はたとわめり  
上皇 後陽成院 慶々召ありて法要を詔問したるひ奏對詳明かふよ  
依て敷感儀くくは權僧正は權られ御まうくく汗衣燕尾等を賜ひ  
少科の昆沙門堂の門室は附せらるゝ又震轡を下したるひ權と轉して正  
小任す同十七年

神君河越は狩したる折くく仙波に立寄せたまひて殿堂と修營せ  
わ社園と寄させたまふ同十八年復命を兼りて日光山に居る

神君 薨去れ後其遺命を奉りて葬を之能山に營と元和三年尊  
靈は日光山に遷坐せり奉る是往古の大職冠の例は儼然則山王

習合の神は鎮たてまつり勅と奉りて  
東照大権現と號し奉る 大樹 台徳公 亦神君よとせたまは  
優寵したるひくく其先元和二年大僧正に任せられ 先帝 正親町院

二十五の御遠忌も侍導師は請したるひ后後寛永二年

大樹 大猷公 命して東叡山と稱しわ師として厩山とす又上皇の  
二宮と 守證親王 日光山の侍門主と請せせり師の侍子に彼は

たゞ其後上野國新田庄世良田山長樂寺を賜ひ  
東照大権現の神祠以下の諸堂と造立あり亦同く二十年の秋

僧正微疾を示す時 大樹 大猷公 と下り紀乃曲相 頼宣公 篤と  
屈し疾と向たり僧正遂に遺語五則と書け 大樹畫三探函に命し

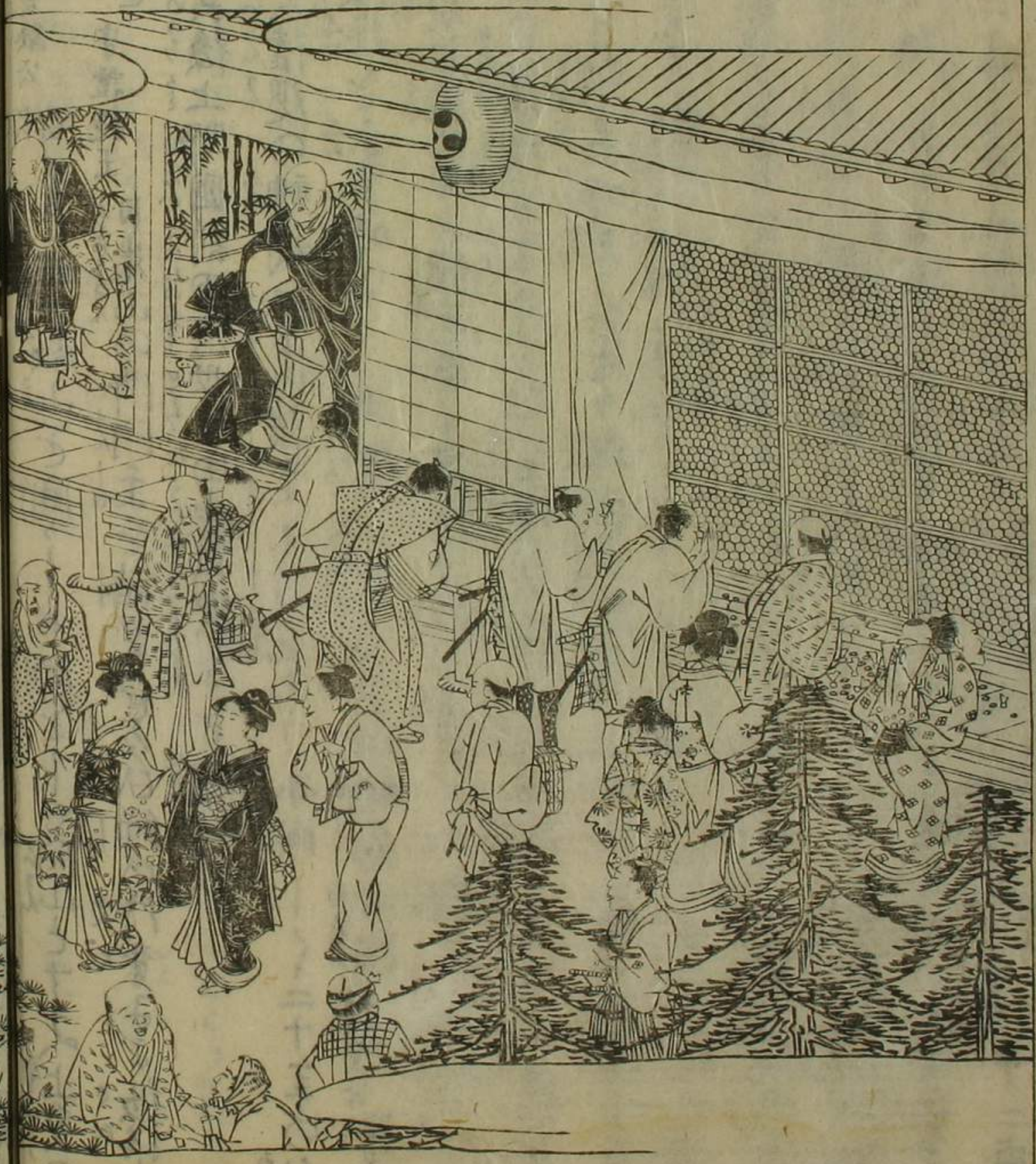
たゞひて其頂相と写さしむ一日唯識論と関心忽は文殊菩薩の來  
現を覺る則其時至るとあり端座合掌して遷化す時寛永二十年

十月二日をり 東國高僧傳は寛永十九年十月二日化寂とあり 紫雲天花の瑞  
あり影堂と當山をくひは日光天台の三山に建る當山慈眼堂其あり

慶安元年慈眼大師と謚號の詔勅を下したるひ  
慈惠大師 諱ハ良源江カ河渡井郡の人父ハ本津氏母ハ物部氏あり  
延喜十二年壬申九月三日に生る 父母子多きを憐れく觀音に祈りて諱  
十二歳



正月三日  
大黒詣



正月三日八都下の  
者人東叡山護國院の  
大黒天(まじろ)此(こ)影(かげ)入  
茶(ちや)信(しん)願(がん)寺(じや)  
世(よ)に靈(れい)驗(げん)著(しやく)し此(こ)日(ひ)供(く)物(ぶつ)  
の儀(ぎ)饒(にぎ)り湯(ゆ)ふひたして  
衆(しゆ)徒(と)の華(は)ふあふ俗(ぞく)  
是(こ)とて福(ふく)の  
湯(ゆ)と  
り









といのり多事年よりなりとて今老病をろほとくまふ今  
 申し擧げてまらるとそ母もひつげたる

おがせふあらん後のまよともいゆるんはとゆれとも思ふ 栄雅

慈眼大師真影

狩野探幽筆

慈眼大師の真影は慈恵大師の影像と共に當山院々須菩提にて一箇月に執奉  
 儀年この十月の御本坊に遷坐あり

大悲藏

佛祖統紀曰 大士藏天竺百籤越圓通百三十籤  
 以支吉凶其應如響相傳是大士化身所述云云

柳當山江戸第一の桶花の名勝として一山花はあふんと云ふ

台命よりて和列吉野山の地勢と摸し植せらるる故に花は速

あり遅ありて山上山下盛とらうてり弥生の花蓋は都鄙の老若貴

とれく賤とれく日毎月社と連てては群遊し花のそわみ尺すの地を

争ふて惟幕張延席を設く詩歌管絃の鶯聲み和し錦衣繡裳の

花影は映し愛及賞咏日の暮とあらん

慈雲山瑞林寺

上野清水門の外武三丁北の方あり日蓮宗よりして

螢澤

谷中宗林寺の境内  
 あり又柳林寺の  
 傍とも螢澤といふ  
 すこ此辺雲の光り  
 化は勝れそり

草地紫と

落る

飛

芭蕉





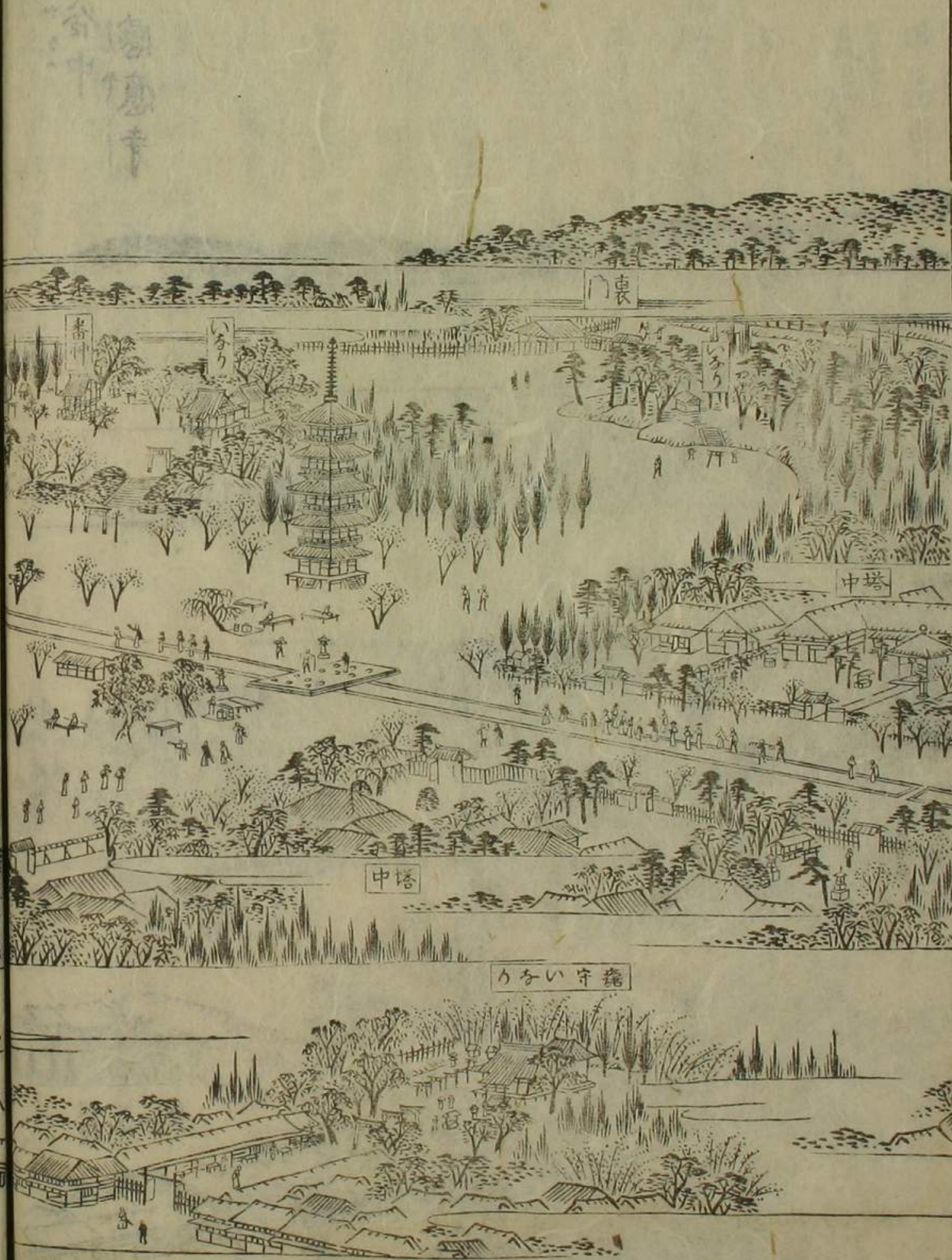
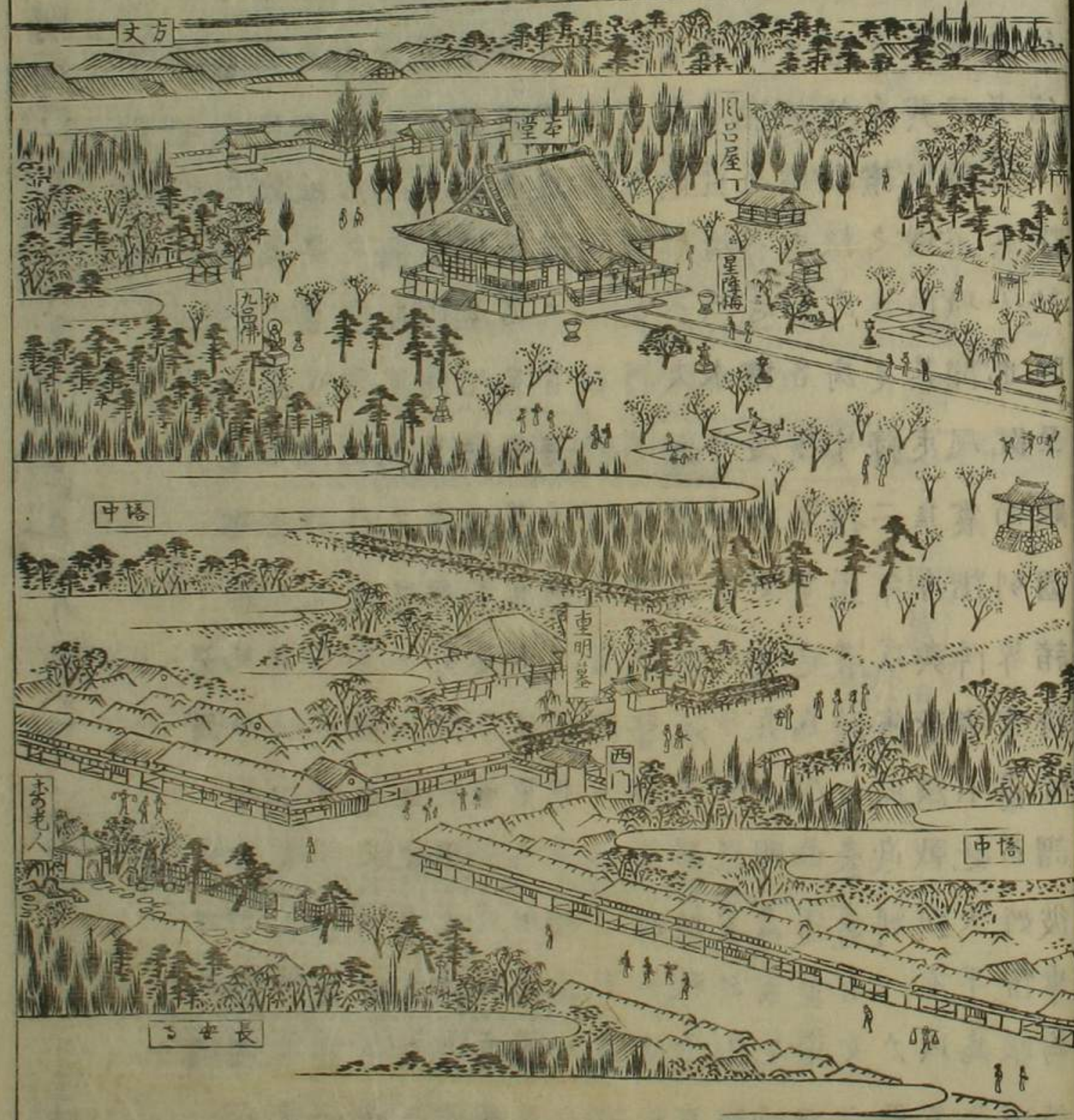


谷中  
感應寺

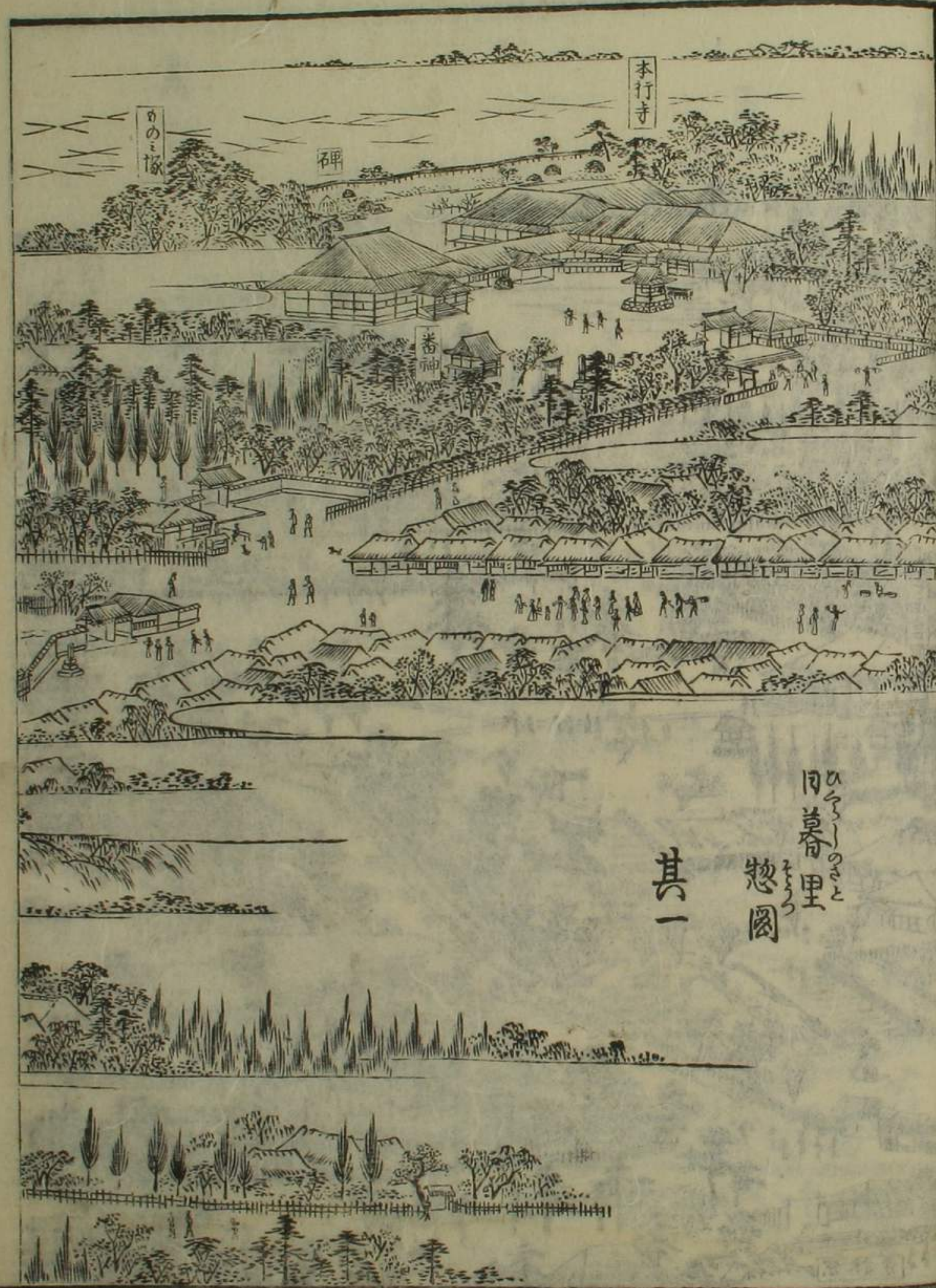
甲品身延山の觸頭江戸三箇寺の一あり元山ハ本山十七世慈雲院日新上人  
 天正十九年れ草創なり奉尊大六の釋迦來ハ延宝五年れ圓縁ノ不  
 ろひて今侍着と有り存せり  
 當寺ノ安直也日蓮大士の像ハびり一因不中  
 感應寺ノありと彼寺政宗のときよりそ後といひ  
 長耀山感應寺 上野谷中門の外ニあり天台宗より奉尊ハ傳教大師  
 の作の毘沙門天と安置ハ當寺始ハ日蓮宗より宗祖上人と元山と日長  
 上人中興ありてゆ々浦一宗の寺院たり元禄年中故ありて台宗に  
 改られ爾より後東叡山ニ属ハ其時大明院宮の清願よりて叡山  
 横川小あり傳教大師の作の毘沙門天の像とこみ移奉尊と  
 せらる京師鞍馬山の毘沙門堂ハ比叡の乾久當りて佛法守護の道場を  
 れハ當寺も東叡山の乾久當と以て鞍馬寺と比せらるといひ境内  
 榎桃の二花ありて春時燠燠をり  
 五層塔 始當寺中興日長上人建立あり一々明和九年の火災ニ焦土とされり仍て  
 寛政の今再建してびり一後也  
 長久山奉行寺 同取小の通ニあり日蓮宗より元山日玄上人六永



其二





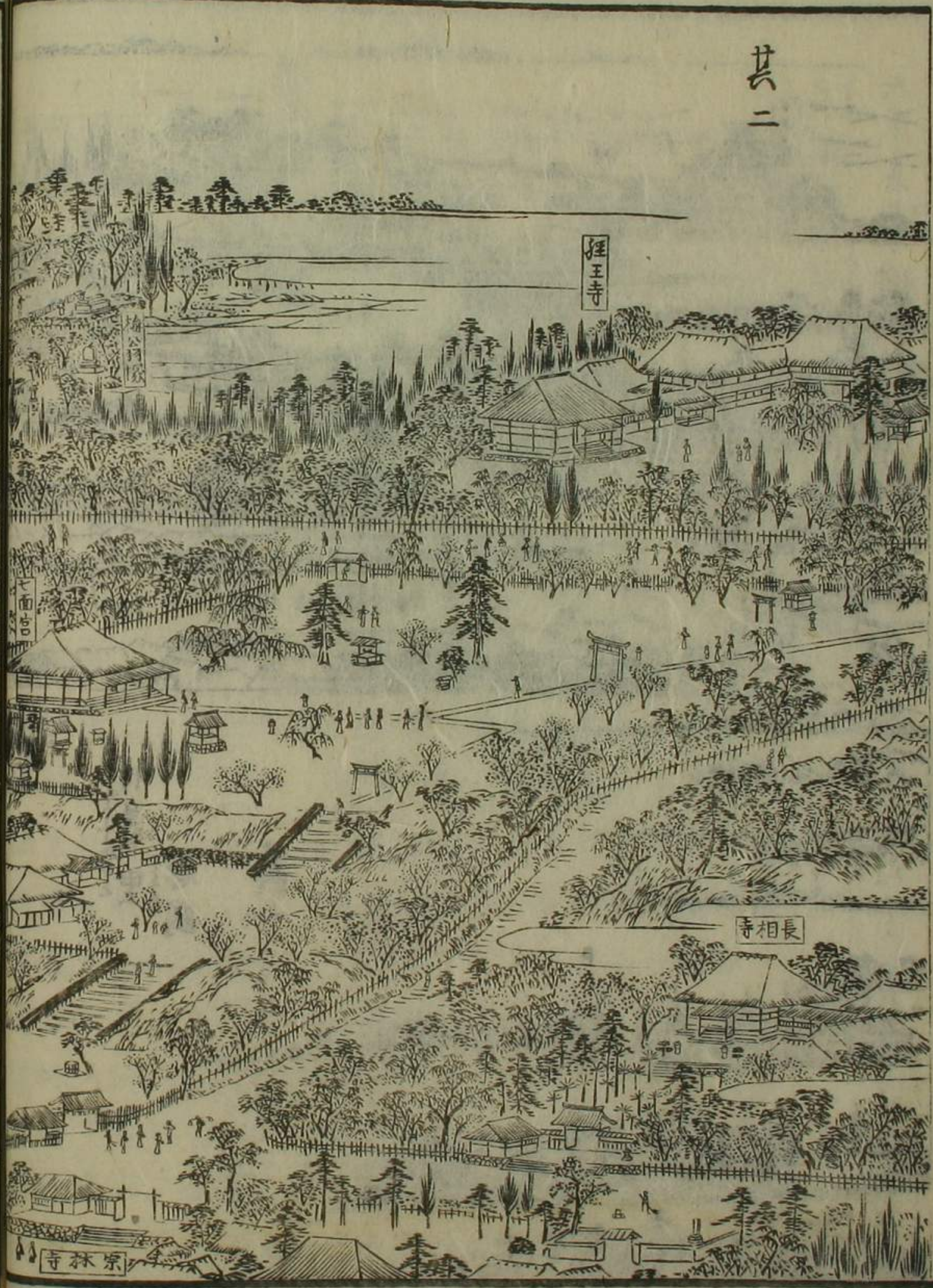


日暮里 惣園 其一

灌杖勝而之二天扇孫名得其攝丘盡百丘則思奚里道  
 增氏衆鎮材世下谷父持斯祀之與爲有唯太太名曰灌  
 脩之兩之專屬戰女道資丘也所山未餘址田田道日丘  
 德有毛正李管爭恢真官蓋寺在皆黍年耳氏氏灌暮碑  
 信者二其兵領諸廓名左不與而用閔于有保無太寺文  
 以皆總封撥上國有資衛畿群道其壘今之郭忘其氏本  
 懷其諸壇之枚瓜大清門得屏灌號壞矣叔之遺也號在  
 初力城險要氏裂志以大矣攝之名臺相自里而寺平東  
 附也聞其長府各博永夫可遷曾矣圯傳昔人丘乃西里都  
 至既風走祿中據涉亨道不於孫寺彷彿太之思其北人郭  
 敵而震集二推其經四灌謂斯今舊徨在不田思其北人郭  
 國列陷每年道黨史年其奇里懸在河谷中而去既田候山太  
 諸界降與戊灌迭善士號也者河侯世里而凶氏臺亦曰氏  
 皆肅不國城智脣汰生光諸室永世太丘里也之址道也灌  
 謂百絕戰武豪齒明道盡灌頰牒中相田其自址道也灌  
 彼姓大利列邁道盡灌頰牒中相田其自址道也灌  
 專悅半在江有文道是相十田遷以羣焉其丘故墟二無山  
 爲眼爲以尸文道是相十田遷以羣焉其丘故墟二無山  
 德道上寡焉武灌時列世氏則守屐故墟二無山

六年草創以往古田道灌の建ちるりといひり當寺庭中道灌  
 年候塚と稱するものあり









根成院



其二

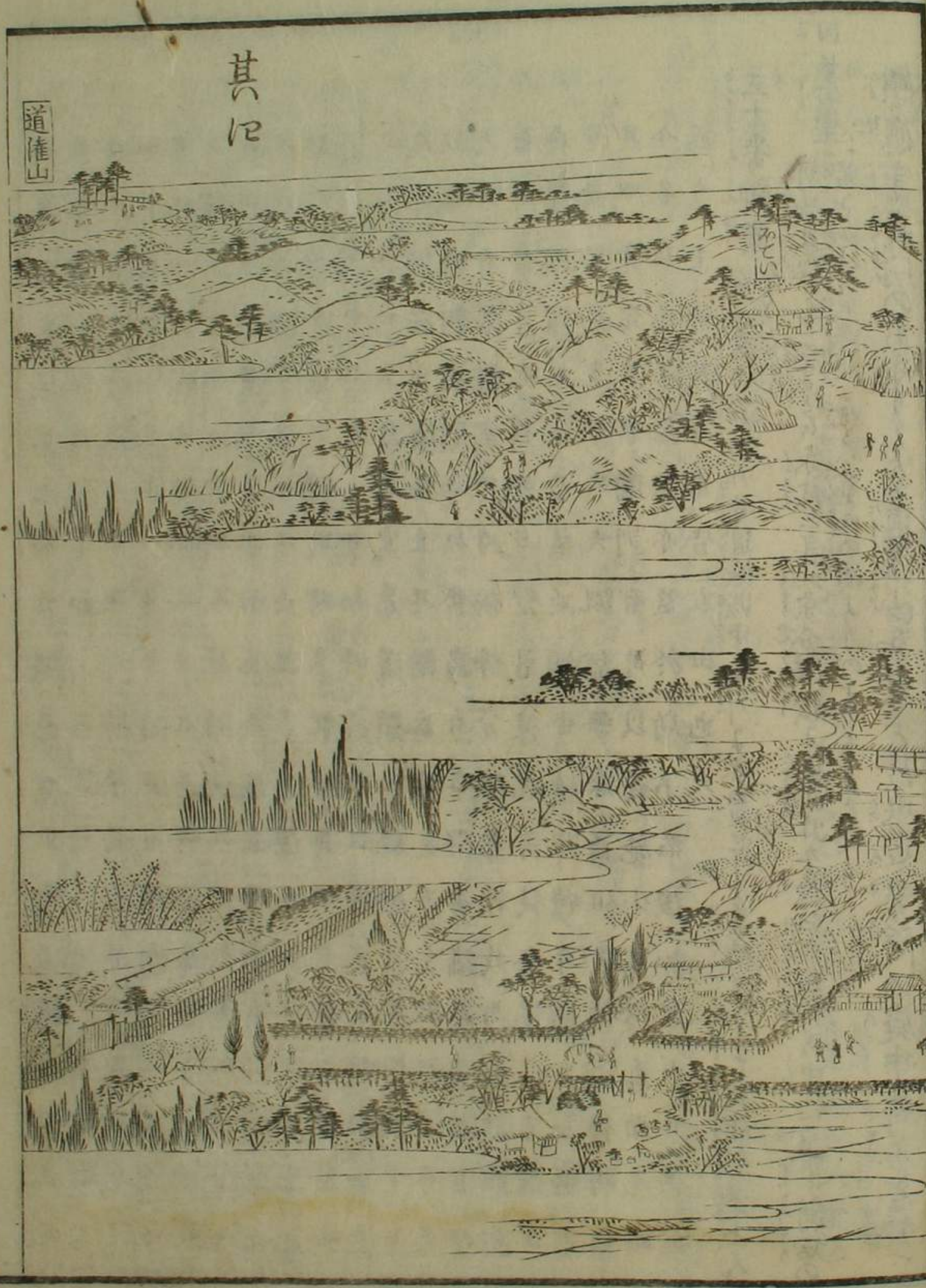
御腰掛所

浄光寺

浄光寺

雨降寺















道灌山徳虫

文月の末を定中  
小してとりし  
名よしあ虫塚  
の辺を寄るとす  
河人吟客に  
味きて終夜その  
清香を独懸す  
中多 童子の言  
ハ勝てぬ  
金比呂の振持  
あつた小  
くくく  
ありあけ  
有明の月と  
行ゆらも  
一真と  
いん



ほろり

す

さ

ゆ

れ

其角





孩こまろうこ此こ樹こ蔭こより 眺あまれのあらわいの流らせの白く布を引くとく此  
 波な黒く髪の山の山の畫似なり 豊と島の村落の眼小ありて耕一畑  
 う川賤の葉まも一金小入利根川の遠帆緑樹のうけに見えがれ一と  
 此れらら白鷺の飛りとく此地の風色画中にあるらぬ  
我人云く往昔此麓の豊島川小橋一入はも道灌の岩城あり一頃ハ茶穀共あり一運送  
の松よりこの松を月堂小せ一のまてはちくといふもあらちち松といふの義はあらぬ人  
の松よりこの松を月堂小せ一のまてはちくといふもあらちち松といふの義はあらぬ人  
の松よりこの松を月堂小せ一のまてはちくといふもあらちち松といふの義はあらぬ人  
 道灌山 一名を城山ともいふ南の新堀を隈一小の平塚小橋一往  
 右を田道灌江戸城小あり一頃出張の岩城とせ一跡ありとも  
 又岡道観坊といへる者の茅宅の地ありとも云一傳ハ道観坊一長道観坊といふ後藤一  
感應寺といふとと若中感應寺の窠基一といふ則此地藥草多く採藥の  
 葦常小こ小来れ一殊小秋の頂ハ松虫鈴虫露小あり一清音  
 をあらはす依て雅客幽人と小来り風小詠一月小歌一て其言  
 を愛せり



